

美人座物語：近代日本のカフェ文化（1）

著者	山路 勝彦
雑誌名	関西学院大学社会学部紀要
号	135
ページ	21-56
発行年	2020-10-31
URL	http://hdl.handle.net/10236/00029129

美人座物語：近代日本のカフェ文化（1）*

山 路 勝 彦**

1 大阪のモダニズム

大正 14（1925）年の大阪市は祝祭気分にあふれていた。近隣の東成郡と西成郡を合併した大阪市は、人口が 200 万を超え、東京を抜いて日本一の大都市に急成長したし、商工業の発達とともに産業全般における発展は、大阪の経済力の増大をもたらした。大都市としての誇りをもった大阪市には、さらに一つの勲章が与えられた。この年、「大阪毎日新聞」の一日当たりの発行部数が 100 万を超し、しかも創刊以来から数えて 15,000 号に達して、大新聞としての地位を不動にしたことである。この慶事を祝して、大阪毎日新聞社の主催、大阪市の後援のもとで一大イベント「大大阪記念博覧会」が開催された。大正 14 年 3 月 15 日から 4 月 30 日までの期間に行われた博覧会は、新聞社が主催した博覧会としては規模が大きかった。入場者がおよそ 130 万人を数えたというから、この博覧会は成功したと言える。

この博覧会開催の目的は、「大阪市の進歩状況を具体的に示し、且つ本社の活発な活躍」（大阪毎日新聞社 1925：1）を祝すためとされ、この目的に即して多彩な展示が会場を飾っていた。工業、商業、貿易などの産業方面、衣食住と日常生活、文芸、劇、音楽などの文化、その他、趣味と娯楽を含め多彩な方面から「大阪」を展示しようと野心的な企画がなされたのである。「博覧会規則」によれば、公式には「大阪ノ文化ヲ発揚シテ産業ノ振興ヲ図ル」ことに目標が定められていて（大阪毎日新聞社 1925：13）、この趣旨に即して多くの展示が飾り立てられていた。パビリオンを

見ただけでも、その様子はうかがい知ることができる。本館には次の 27 の区画が設定され、それぞれが大阪の特色を展示していた（大阪毎日新聞社 1925：123-125）。

①水の大阪、②キネマの大阪、③空の大阪、④交通の大阪、⑤教育の大阪、⑥保険の大阪、⑦信仰の大阪、⑧運動の大阪、⑨社会事業の大阪、⑩子供の大阪、⑪女の大阪、⑫農林の大阪、⑬名物名所の大阪、⑭工業の大阪、⑮劇と音楽の大阪、⑯建築の大阪、⑰食料の大阪、⑱文芸の大阪、⑲電化の大阪、⑳光と燃料の大阪、㉑工芸の大阪、㉒服飾の大阪、㉓趣味と娯楽の大阪、㉔商業の大阪、㉕貿易の大阪、㉖家庭の大阪、㉗文化の大阪

ここで、いくつかの説明が必要となる。「食料の大阪」は市民が一日に消費する食糧の種類とカロリー、価格などを展示する区画である。「文芸の大阪」では、さすがに大阪ゆかりの井原西鶴、近松門左衛門などを主役とした展示、「劇と音楽の大阪」は文楽の人形劇に題材をとり、芝居気分を盛り立てようとした展示である。「女の展示」では大阪婦人団体の活動、例えば広岡浅子など歴史上の女性人物の紹介が展示の対象に据えられている。このように市民生活、あるいは産業や経済活動を模型などを用いて、あたかも物語を紡ぐように大阪そのものが総花式にジオラマで、あるいは写真や模型で飾りつけられたのである。

しかしながら、その会場には時代の最先端を行くような展示、あるいは西洋風のファッションに関わる展示は見られない。例えば大阪に拠点を持

*キーワード：カフェ、女給、美人座、赤玉、道頓堀、エロティック・キャピタル、植民地（台湾、満州、朝鮮）

**関西学院大学名誉教授

つ化粧品会社、クラブコスメティックも参加しているが、地元企業としての参加であって、商品の宣伝効果に優先性が与えられている感じは否定できない。大阪を総花的に、主に歴史的観点から展示しようとする試みがこの博覧会では目立ちすぎ、大正から昭和にかけて起こっていた生活様式の変化の展示はおざなりであった。

大正期はモダンガールの登場によって近代都市の風俗は変貌を遂げようとしていた。その尖端的な流行の発祥地は東京・銀座であったにしても、それ以外の地方都市、例えば大阪・道頓堀も独自の風俗を生み出しながら近代を形作っていった歴史があった。地域住民に生活情報や文化を供給する出版社として、心斎橋に拠点を置く「道頓堀社」が活動を開始したのは大正8年で、4月には『道頓堀』創刊号を刊行している。その内容には郷土芸能が大きな位置を占めていたのは確かであり、また大阪遊郭の美人芸妓を人気投票で決めるという大衆受けをする企画が人気をさらってもいたのも事実であるが、大正8年第9号の『道頓堀』の表紙はモダンガールで飾られていたことを知っておく必要がある(図1)。本文でモダンガールの解説がなされていたわけではないが、雑誌の表紙にモダンガールが描かれていて、それも大正8年の時点であったことは記憶にとどめておいてよい。その表紙を描いたのは、若くして他界した、フランス帰りの住田良三であった¹⁾。

それから3年後の大正11年5月、大阪のプラトン社は隔月刊の雑誌『女性』を出版する。大手化粧品会社のクラブコスメティックは自己の製品を宣伝する目的で中山太陽堂を創立し、広告活動を展開し、その一環として表題通りの「女性」を主題にした雑誌を刊行したのである。この雑誌に触発されるようにして、さらにその数年後には、大阪市周辺地域では近代的な女性をめぐる様々な表象が創出されていく。このようにして、大正から昭和にかけてはモダンなファッションが続々と登場し、道頓堀もまたその一翼を担っていた土地柄であった。

大正15年3月に、大阪府北河内郡枚方町(現



図1 『道頓堀』第9号(大正8年11月)の表紙
住田良三の描いたモダンガール。

・枚方市)から定期刊行物として刊行された『家庭講座』は、縦25cm、横12cmという変形サイズの、平均約60ページの月刊誌である。編輯兼発行人は小野千代といい、発行所は「家庭講座発行所」と雑誌の奥付には記されている。この雑誌が女性読者を意識して制作されたことは、掲載内容から判断される。一見すると地域社会の情報誌のような印象を与えるが、執筆陣は多岐にわたり、かつ記事の内容も多方面に及んでいて、短命で終わったとはいえ、かなりの知的水準を維持した雑誌であったと評価される²⁾。

表紙の図案担当者は毎号のように交替し、一時は高橋春佳も加わっていた。京都に絵葉書などの制作を業務にしていた観光美術出版の卸会社、山口青旭堂があり、そこでデザインの仕事を担当していたのが高橋春佳であった(三好2018:118-119)。若き女学生、幼き無垢な幼児、アールデコ調の建造物、幻想的な風景画など、抒情的な版画

1) 洋画家の住田良三については橋爪節也(2005:244-247)が紹介している。

2) 第3年5月号以後は所在が不明で、終刊時期は不明である。



図2 『家庭講座』(第3年4月号、昭和3年)の表紙
高橋春佳の描いたモダンガール。

を多く作成していた高橋は『家庭講座』にも作品を依頼されている。昭和2、3年頃に高橋が描いたデザインの主な作品は断髪のモダンガールを題材にしていた(図2)。

この雑誌の執筆陣には、地方の小雑誌とは思えないほど豪華な顔ぶれが並んでいる。第2年新年号(昭和2年1月号)には鶴見祐輔(「外国の夫婦喧嘩」)、末弘巖太郎(「離婚上の侮蔑と虐待」)、千葉亀雄(「当面の婦人問題」)、賀川豊彦(「人間と靴」)など著名人が名を連ね、またオリンピック選手の人見絹枝(「嬉しき思ひで」)などの随筆も読むことができる。いずれも評論風の短編であるが、家族問題、女性問題が多く寄稿されていることから、明らかに女性を対象にした雑誌と言える。2年3号には、巖谷小波(「今の小説と昔の小説」)、武者小路実篤(「生活と文芸」)、

小林一三(「忙中閑談」)などの著名人の随筆もあり、その他、ゴシップ記事、化粧、料理、時事問題が紙面を飾っていて、女性向け総合雑誌の小型普及版を思わせる。

なかでも興味をそそられるのは、千葉亀雄「モダンガール」という短文である。その短文で千葉が説いたモダン・ガールとは、「真に目覚めた現代式の新しい女、男子に劣らないやうな教養のある女」を指している(千葉1927:21)。モダンガールの語彙はすでに文人の間では使われていて、千葉亀雄の議論が新鮮であったわけではない。とはいっても、その言葉は当時の流行語になり、日本中に広く普及し、枚方のような地方の小規模出版物社の表紙も飾るほどになっていて、その普及の速度には改めて考えさせられる。

モダンガールの言葉自体は、イギリス滞在の経験をもつ北沢秀一が『近代女性の表現』(北沢1923)で唱導したのが最初の用法である。翌年、北沢はその言葉を練り直して、「少しも伝統的思想を持たない、何よりも自己を尊重する全く新しき女性である」と規定した(北沢1924:230)。この時代には、伝統からの解放を試みる思想が欧米から持ち込まれ、「男女同権」が叫ばれ、「婦人解放」の運動が唱導され、社会思想の新潮流が生まれ出ていた。同じ志を持って活発な論陣を張っていた思想家、あるいは社会運動家は多く、そのなかでも新居格は忘れることができない。新居が「近代女性の社会的考察」という論文を『太陽』(31巻11号)に寄稿したのは、大正14(1925)年のことである。その論文での定義に従えば、モダンガールとは「既成観念に反逆の弓を引」き、「物事をハッキリと言葉にも行為にも表現」して、「因習や伝統に拘束されずに動く」、新しき時代の女性であった(新居1925:143-144)。新居の頭には、当然、留学先であったフランスでの見聞があったのであろう。モダンガールとは、因習を否定して近代に新鮮味を感じた女の心意気を積極的に称揚した言葉であった。この言葉は、新しい時代を夢見た識者の間で広まり、大正末から昭和にかけて日本中を駆け巡っていった³⁾。

3) モダンガールについてのもっとも興味が持てる書物は、近年では生田誠(2012)である。その書ではすこぶる豊富な図象が紹介されていて、その全貌が分かる。また、斎藤(2000)の著作は軽妙な筆致で描かれていて、その文章は楽しめる。ほかに、近代日本を対象とした文献には、高橋康雄(1999)、浅井カヨ(2016)、鈴木貞美

「42 人の大正快女伝」と副題をつけた書物の著者は森まゆみである。大正デモクラシーの潮流に乗って生まれ、「女性解放」をめざしたモダンガールたちの評伝が、その著書では紹介されている。なかでも、読売新聞社の記者として活躍した望月百合子が、いち早くこの女性解放運動に共鳴し、決意の証として断髪洋装を果たした経緯については興味が湧く。その断髪洋装をした時期は大正 8 年と想定され、「元祖モダンガール」として位置づけられている（森 2010: 16；望月 1928: 153）。ほぼ同じ時期、原阿佐緒（1928: 144）も断髪を決意している。

大正末から昭和初めにかけて流行したモダンガールと呼ばれる言葉は、「教養のある女」が身につけた思想性を念頭に置いて使われていただけではなく、風俗のうえで断髪をしていることもまた必要であった。歌手の淡谷のり子は大正 12 年に青森から上京し、絵のモデルになった時、断髪したと言う（淡谷 1975: 188）。その後、洋装を試み、ジャズやシャンソンに興じていくにつれ、当時の流行の最先端を行くモダンガールとして認知されるようになった、と淡谷は述懐している。だが、「モダンガール先陣争い」に最初に名乗りを上げたのは望月百合子か淡谷のり子かという判定は置いておくとして、兩人とも流行の最先端を走っていた人物と理解しておけば、それでよい。

というのも、『道頓堀』に描かれた、先きの住田良三のスケッチは、望月や淡谷より早い時期に描かれ、それは大正 8 年 11 月の頃であった。住田のスケッチのモデルは誰だか分からないが、デザイン、もしくは絵画などの視覚表現としてモダンガールを描いた最初の人物は住田であった。このことを考えると、住田への評価とともに、道頓堀風俗の意外とも思える側面、その尖端性が浮かんてくる。

このような大正期の都市の風俗、とりわけファッションの世界は、昭和期になると地方都市にまで拡大し、いっそう急速に、しかも深く浸透していった。枚方市は、その意味で昭和の日本を体現したよい実例であって、大阪市郊外の田舎町であった枚方町（現・枚方市）がいかに尖端的な流行

作りをしていたのか、理解されるに違いない。

現在では高級住宅地として全国的に名をなしている芦屋市が、国有林の払い下げによって住宅地として開発されたのは、たかだか 100 年くらい前、昭和 3（1928）年のことにすぎない。その昔、兵庫県武庫郡精道村（後の芦屋市）で文化活動をしていた柴山燐子が、新しい時代の息吹を感じ、昭和 8 年 11 月に「ファッション社」を誕生させ、翌月には月刊誌『ファッション』（後、一時的に『婦人評論』と改題）を刊行している。その雑誌発刊の目的は、「外国のファッションの中から日本人に向くものを紹介」することにあった（阪急沿線都市研究会 1994: 1）。後に柴山は座談会の席上、成立事情を説明し、「関西の流行は関西から、そしてファッションクラブの方々から流行を創み出して」いきたかった、といささか自負心を込めて語っている（柴山など〈ファッションクラブ流行座談会〉1934: 23）。

この雑誌、『ファッション』には、実際に洋服、



図 3 『ファッション』（7 巻 1 月号、昭和 14 年）の表紙
西欧人をモデルにしている。

↘ 編（1989）など多くの著作が出版されているが、これ以上、ここでは言及しない。



図4 『ファッション』に記載された女性帽子
出典：『ファッション』7-1: 14-15 (1939年)。

洋髪、洋靴など、欧米調の服飾スタイルが紹介され、毎号のように洋装スタイルが図版入りで登場している。図3は昭和14年1月(7巻1月号)の表紙を飾る女性、図4は「今月のファッション」(pp.8-9)と「春の帽子」(pp.14-15)の写真、である。写真やイラストに描かれているのは西洋人をモデルにしていて、外国のファッションの紹介に力点を置く思想上の立ち位置が見て取れる。時流に即した雑誌だけあって、尾関岩二「洋風断髪論」(昭和14年)、細井悟の「流行とダンス」(昭和9年)、細井悟の「社交ダンスは何処へ行く」(昭和9年)などの論考も掲載され、時代の先端性を意識させられてしまう。

もちろん、こうした流行は大阪よりすでに早く東京でも見られ、『婦人公論』『婦女界』『婦人倶楽部』などが精力的に取り組んできたテーマであった。昭和9年には本格的な服飾専門誌、『スタイルブック』も創刊されている。それらの雑誌は

全国的な読者を持っていて、人々に与えた影響は測り知れなかった。それに比べると、芦屋からの発信はあくまで地域限定的であって、知名度を上げるのに劣勢は隠せなかった。しかしながら、タイトルに『ファッション』を日本で最初に選択したことに対しては、芦屋の先見性を評価しておくべきであろう⁴⁾。

2 道頓堀の大正期

これからは主に大阪のカフェの歴史を語るのであるが、その前に東京のカフェ事情について整理しておきたい。その理由は、近代日本のカフェの黎明は明治期の東京に求める見解が通例だからである。明治20(1888)年4月13日の『読売新聞』には、「遠からん者は鉄道馬車に乗って来たまへ、近くハ鳥渡寄って一杯を喫したまへ」と時代劇の台詞をまねて、「喫茶店」の開設を告げる

4) この指摘は明尾圭造(2005: 27)がすでに行っている。



図5 「可否茶館」の光景（『文庫』9号、挿絵）
出典：眉山人 1889、挿絵。

記事が掲載された。その喫茶店は「可否茶館」という名称のコーヒー店であって、時代劇に寄せた謳い文句ながら、それは新たな西洋文化の到来を告げる記事であった。確かに、西洋文化の薫りは歴史文献を見ても漂ってくる。図5は、東京・下谷西黒門町（現：台東区上野一丁目）にできた可否茶館の内部を表したもので、ハイカラな青年が右手にコップをもち、隣で談笑している娘たちを冷やかしているかのような光景が描かれている（眉山人1889：挿絵）。そのコップにはおそらくコーヒーが注がれていたであろう⁵⁾。

しかしながら、「可否茶館」はコーヒーだけの専門店ではなかった。店内には「トランプ、クリケット、碁、將基」などの設備も置かれていて（思案外史1888：13）、コーヒーショップというよりは、談話室を兼ねた手軽な遊技場と言った方がふさわしい。この可否茶館は数年で経営不振に陥り、廃業の憂き目をみたので、西欧を模倣した試みは後続を断たれてしまった。可否茶館の性格が多様な分野を含んでいたにしても、フランスに通じるカフェ、すなわち文人たちの社交場としてのカフェの登場は、それよりも遅れて24年後の出来事であって、そのカフェの出現こそが近代日本のカフェ文化の源流に位置する、と理解した方

がよい。

概括的に言えば、フランス文化に憧憬を抱いていた松山省三が銀座にプランタンという名前のカフェを開業したことから始まる、というのが通説である。確かに、それは事実であると判断される。フランス帰りの松山がパリで経験した社交クラブを模範として、プランタンというカフェを開業したのは、明治44年4月のことであった（松山1934：50）。小山内薫などが常連客として通うことで、このカフェは評判になる。この年、続けざまに銀座にはライオン、パウリスタなどの名称で親しまれたカフェが登場していく。これらのカフェは時の経過とともに、銀座での老舗として評価されていき、大正から昭和期に至ると多くの文人が集うようになる。菊池寛、広津和郎、久米正雄などが常連として出入りしていったのもこの頃である。永井荷風もまた、プランタンをはじめ有名カフェに通う、カフェ愛好者の一人であった。

そのプランタンは、可否茶館とは趣を異にし、当初から文芸家たちの談笑の場として、あるいは余興の場としての性格を持っていた。文人たちの集いと言えば、例えばカフェでの「仮装会」の実演があった。プランタンの常連が集まり、小山内薫はドン・ファンに扮し、生田葵山は預言者に仮装するなど余興を楽しむ機会を設けたり（『読売新聞』明治45年2月22日）、あるいは雛祭りということで、ハイカラな食べ物を楽しみ一日を過ごしていたこともあった（『読売新聞』明治45年3月3日）。

カフェ・ライオンの開店は明治44年8月10日、カフェ・パウリスタは12月12日である。ライオンは前もって新聞広告を出し、「純粹欧米式」を唱え、開店日には精養軒の料理でもてなすと宣言し、同時に一風変わった余興を企て、体重二十貫（75キロ）以上の人には景品を贈呈するとの広告も出している（『東京朝日新聞』明治44年8月9日）。パウリスタは、本場ブラジルから取り寄せたコーヒーを提供することで、付加価値を

5) カフェの起源については、鄭永慶によって、明治21年に東京・上野に開設された「可否茶館」を最初に論じるのが一般的である。ここに引用した「可否茶館」（『文庫』第19号、明治22年）は確かにコーヒーを供する「談話室」である。しかし大正期のカフェは、すぐ後に論じるように松山省三が開設したフランス起源のもので、起源の系統関係からみれば、別種が存在である。「可否茶館」については、星田宏司（2008）が参考になる。

高めていった（『読売新聞』明治44年12月12日）⁶⁾。

明治44年はカフェの歴史として画期的な一年であった。この気運に乗り、新聞各社はカフェの流行を社会問題と捉え、特集記事も組むようになる。プランタンの開業後ほどなくして、明治44年8月から9月にかけて『東京朝日新聞』はカフェを主題にした連載記事、「カフエー(1)～(6)」を載せている。この新たに出現した西欧文化に対して書き立てた論調は、物珍しそうに、そして皮肉をこめて綴られている。「銀座のライオンは、各種各方面のお客を呼んで、歌舞曲芸に花売り娘、浮ッ調子の文明風を吹かして居れで、プランタンには現代張った文学的臭みあり」と（「カフエー(5)：酒の香と文芸趣味」『東京朝日新聞』明治44年9月5日）。かくしてプランタンは小山内薫、吉井勇、正宗白鳥などの「高等遊民の集会所」と化してしまつたと皮肉る有様である。カフェ・プランタンは「貨幣不足党」などと陰口を告げられながら、新聞紙上では辛口の批評が続く。そしてカフェが繁昌した年、明治44年の秋風は、「ハイカラ風の増長か」、はてさて「不景気の一現象か」と疑問を投げかける「カフエー(6)：十銭美味しい喫茶店」『東京朝日新聞』明治44年9月6日)。

大阪でのカフェに話題を移してみたい。その前に今一度、大正8年に創刊された月刊誌『道頓堀』を取り上げてみたい。その雑誌は、当時の大阪の繁華街、道頓堀の賑わいを伝える情報誌として価値を持っている。浪花座をはじめとした大阪の興行界の状況が、多数の挿絵を交えて語られている内容はおおいに参考になる。先に見たように、大正8年11月号の表紙を飾ったデザインは住田良三が描く女性であった。フランス遊学を経験し、洋画家として鬼才の持ち主と評価される住田は、惜しむべきことにパリで客死してしまったが、画家としての才能を残していた（橋爪節也2005：245-246）。その奇才から表現されたデザインは艶やかな光沢を放っていた。流し目で帽子を被り、厚化粧を施しながらも、なおかつ理知的風

貌を湛えた女性の顔立ちは、昭和期に流行した摩登ガールをまさに先取りした姿である。この雑誌が発行されたのが大正8年であった。いささか繰り返しの表現が多くなったと感じられるかも知れないが、大正期の大阪の流行を考えるうえで、この年代は記憶しておきたい。江戸時代から続く古典芸能を伝える道頓堀界限は、大阪の古典芸能を支える発信基地として確固とした地位を占めている一方で、その道頓堀はヨーロッパ風のカフェ文化の揺籃地の一つでもあった。

最初に登場した大阪のカフェは、すでに多くの先達が論じているように、明治期末まで遡ることができ、外国人居留地を控えた川口河畔で営業を開始したキサラギであった。明治40年代に登場したキサラギの正確な成立時期ははっきりしないようだが、東京で開店したプランタンの開業が明治44年4月であって、それとほぼ同じ頃に、東京とは別個に開業したと考えられている（橋爪節也2003a：48；永井良和2004：450-452）（図6）。このカフェ・キサラギが醸し出していた雰囲気は西欧風情であることは、食満南北、足立源一郎、鶴丸梅太郎、宇崎純一、住田良三などの文学・美術・音楽などの愛好家の溜まり場であったという証言をもとに考えると、納得がいく（寺川1933：47-48）。けれども、キサラギの繁昌は長く続かず、間もなくしてカフェの繁栄する拠点は大阪市内に移り、次々と新規参入するカフェが登場していく。その代表格が、大正初期に道頓堀で開業し



図6 カフェ・キサラギの光景
出典：寺川信 1933：47。

6) カフェ・パウリスタについては、長谷川（2008）が詳しい。本書では、ブラジル移民が日本に最初に「珈琲文化」をもたらした歴史が描かれている。



図7 キャバレーゾパノンの宣伝広告
出典：『道頓堀』8：19、1919年。



図8 銀座のカフェ・ライオンの女給（大正期）。
立ちながらエプロン掛けでサービスする女給を図版10と比べると、差異が明確である。
出典：『婦人画報』78（1913年）の口絵写真。

たパノン（キャバレーゾパノン Cabaret de Pannon）であった（橋爪節也 2005）。

パノンの総支配人は、多年にわたり欧米各国を歴訪し、レストラン経営に手腕を発揮した奥田安之介である。その奥田はフランス仕込みの料理法を広めようとし、「西洋料理に就て」というエッセイを『道頓堀』に寄稿していて、フランス料理の草創期の光景を眼にすることができる。（図7）現在の日本の家庭ではありふれたマヨネーズやドレッシングなどの調味料、キャビアやサーモンなどの食材を用いてのオードブル料理を紹介し、さらに洋酒を提供しつつ西洋料理を看板にしたカフェの営業を開始していた（奥田 1919：21，1920：36）。

パノンの創り出した風情は、日比繁治郎の表現に従えば、「古い仏蘭西のどこかの町の一角にあるやうな趣味的な落ちついた」上品なカフェであった。この趨勢は昭和2、3年頃までは続いていた。日比の報告で大切な点は、昭和期に見られるような女給の濃厚な接待はなく、大勢の文士らが集って芸術談議に花を咲かせていたという指摘である。日比は当時を回想しながら、店内の光景を紹介している（日比 1930：91）。

勿論今のやうに女給の白粉で呼ぶ店ではない。二三人の小女がコップを選び皿を配ってゐた。棚には古い洋酒の瓶が数多く並び、精選された珈琲や茶があった。

この発言に引き続き、さらに日比は、気楽にカフェで談笑しあう人たちについて語っている（日比 1930：91）。

若い洋画家達が巷の風景を談じ大阪の町の女の風俗を談りあったりしてゐた。酒通も茶の通も煙草の通も、さほど気取ったものではなく、道（さす）が職掌柄で実際経験の通が多かった芸術家蔡といふやうな人も顔を出した。新空気に浸ることの好きな若い俳優もゐた。姉さん株の芸者衆も時に昼休みの茶を呑みに入ってきた。

パノンについては、その建物と内部の状況を知



図9 キャバレー・ズ・パノンの全容

出典：『朝日グラフィック』18号、1921年（『大阪朝日新聞』14, 136号付録、収録）。

ることができる。その外観、そこに描かれた人物像を見ながら説明文を読むと、昭和期のエロスを売り物にするカフェとは違う姿が浮かんでくる（図9）。この第9図は「新築落成」を記念し、大阪道頓堀に建てられた「日本一理想の大食堂」のパノンの外観である（『朝日グラフィック』13号、大正10年5月1日）。その紹介文には、こう書かれている。

祝賀、送迎、婚礼披露、其他百般の御宴会御集会等の御需に応じ充分御便利相計い可申候

この新築建物のパノンは5月9日から営業を始めると伝え、婚礼披露の需要にも応じるという多角経営の「大食堂」であった。建築構造は不明ながら、この図ではネクタイを締めた給仕と思しき人物（男）とともに、母と娘の親子と思われる二人連れが描かれている。母親は和服であるが、娘と思しき女性は帽子を着用し、マフラーをまとい、まったくの洋装のモダンガールとして描かれている。このように、カフェは最新の流行を見せる社交空間として存在し、いまだ性的享楽を楽しむ場所とは言えなかった。

同様な光景は、道頓堀で大正期に繁昌したカフェ、パウリスタにも見ることができる。鶴丸梅太郎もまた、その女給仕は上品であった、と回顧

している。「女ボーイ（その時分には女給なることばもなかった）も上品に行儀よくサービスをして客席にわり込んで、話の仲間入りをするなどのことは逆もなかった」（鶴丸1932：41）。続いて、こうも付け加えている。「先づ女給が今のようなサービス振りをやりだしたのはパノンの出来た後であった」（鶴丸1932：42）。

このパノンをはじめ大正中期の道頓堀の多くのカフェは、昭和期に見られた女給のエロスを売り物にはしていなかったというのが、日比の指摘の核心である。そこには洋酒、茶、そしてコーヒーの味を楽しみながら談笑する光景、まさにヨーロッパでしばしば見られるカフェの光景が展開されていたことになる。その空間には文士、俳優、さらには昼の憩いの時間を過ごす芸者衆の思い思いの気分が充溢していた。草創期のプランタンが文芸家たちの遊興の場としての性格も持って、「仮装会」を楽しんでいたことはすでに述べた。この遊興の場が大正末期でも維持されていたのは、確かである。『東京朝日新聞』（大正14年3月18日、同21日）の記事は、パリのカルチェ・ラタンの雰囲気を楽しむ「芸術家祭」がプランタンで行われ、高村光雲をはじめとした東都美術家の大物が参集した、と伝えている。内実は徹夜で酒食を共にして楽しんだだけのようであるが、いまだカフェには芸術家のたまり場という気風が漂って



図10 女給たちに囲まれた菊池寛
出典：弘中1935：挿絵写真。

いたと考えてよい。

大正期から昭和期にかけてのカフェの変化は、図8・図9を図10と比べてみると、その差異が明白となる。図10は、昭和10（1935）年に呉市で「国防博覧会」が開催された時、講演を頼まれた菊池寛が、夜の憩いの時間に「キャバレー・ラパン」を訪れ、和服姿の女給と閑談している写真である（弘中1935：挿入写真）。その写真画像の一番の特徴は室内装飾の華麗さであり、濃厚接触を促すような座席の形態であり、これらより判断すると、菊池寛と女給との接近距離はきわめて近く、その醸し出す雰囲気にはエロ仕掛けが漂っているように思える。

一方、『道頓堀』に描かれたカフェ、もしくは「食堂」を見ると、女給が顧客と同席して閑談する光景も描かれていて、それだから日比の観察は不十分であって、必ずしもすべてのカフェに当てはまるものではなかった、と注釈を加えることは許されるであろう。女給と同席しての閑談は、菊池寛ほどの接触度はなく、ましてや一般的ではなかったにしても、大正期においても来客との閑談を



図11 『道頓堀』3号（1919年）に描かれた女給。
エプロン掛け、和服姿で来客と閑談する光景が見られる。しかし、店内装飾は簡素であった。
出典：著者不詳b1919：15。

示すスケッチは残されている。『道頓堀』3号に掲載された図11を検証してみると、その事情は日比が述べたほど単純ではないことに気づく（著者不詳b1919：15）。「バアとカフェの女」と題する記事を掲載した創刊号には、大正8年の道頓堀のカフェ風俗が手際よく紹介された記事が載っていて、当時の状況が理解できる。その記事では、エプロンを着た女給（当時の呼称「女給仕」）の接客態度に応じて、カフェは「食物本位」と「給仕女本位」との二種の類型に分類される、と言う。「食物本位」とは、女給の仕事がたんに飲食物を客に運ぶことを指している。これに対して「給仕女本位」とは、来客と同席して閑談をする女給がカフェの看板になる形態を指している。「給仕女本位」のカフェをさらに説明すれば、「チャーミングな目を時にしばたく、白粉女」を見に行くことを目的としたカフェのことである。（著者不詳a1919：13）。この大正期のカフェについては、作家の宇野浩二の証言が参考になる。当時、大阪の貧乏学生であった宇野は、五銭のコーヒーを飲むだけで女給と話ができると喜んでカフェ通いをしていて、「女給はたしかに我々学生の友」であったとまで述懐している（宇野1925：120）。

しかしながら、カフェは単に学生だけの溜まり場ではないし、なによりも室内環境を整えていけば、女給と来客との関係が一変してしまっても不思議ではない。カフェの顧客の主流が学生から中

堅会社員になり、また室内にソファを備え、顧客と女給が同席すれば、会話の内容が「大人の世界」へと変容していくのも自然なことである。この延長線上に、菊池寛の通った昭和のカフェ、言い換えれば、女給自身の性的魅力を発散させるカフェが近づいてくる。統計的に多くはなかったと推定されるが、昭和期に見られたエロスを基本としたカフェの萌芽は、今までの論理を辿っていけば、すでに大正中期頃には出現しつつあったと推測される。言い換えると、「給仕女本位」のカフェはまだ主流とは言えなかったにしても、その特徴を持ったカフェは大正期には姿を現しつつあった、と考えてよい。

その記事の著者は、さらに「給仕女本位」のカフェの弊害を指摘していて、その分析には興味が沸いてくる。美人女給を見たさの感情が高じることで、カフェが不良青少年の巢窟になりうるし、それと連動してカフェが繁昌すれば金銭目当てで就職志望の女給が増える、と著者は筆を進めている。女給になった理由には、技芸がなく芸妓にはなり得なかったから、あるいは出身者には貧困階層が多いなど、昭和期に顕在化した社会の格差問題を先取りするかの筆致でカフェのありようを論じているのは（著者不詳 a 1919: 13）、著者の卓見と評価してよい。実際に昭和期には、カフェは大きな「社会問題」として新聞紙上を賑やいていく。「女給」を主題とした小説、そして映画が登場したのも、その頃である。

大正 8（1919）年は、第一次世界大戦終了直後であって、様々な矛盾が噴出した時期であると同時に、生活の豊かさを求めて消費への欲望が深まった時代でもある。消費生活の高まりは、やがて新しい昭和の時代を作り上げていく。その中心に道頓堀が控えていた。道頓堀は先駆的な都会であった。それでは、その地から何が生み出されたのであろうか。

3 進化する歓楽街：美人座の登場

村嶋帰之の描き出した昭和初期の大阪の光景は、傍目には享乐的と映りながら、他方では活気に満ちた都市の息遣いを感じさせ、多くの読者の目を楽しませてくれている。とりわけ、『村嶋帰

之著作選集』（第一巻）に収録された『歓楽の王宮 カフェー』、および『カフェー考現学』は、新聞記者としての視点からする地道な観察に裏打ちされていて、今なお当時の世相を彷彿させる名著として輝いている。大正末から昭和にかけては、東京や大阪などの大都市は近代化の波を受けて、大衆文化が咲き誇っていた時代であった。この時代、人々は足繁くカフェに通い、ひと時の憩いの場を楽しんでいた。

カフェ自体はすでに明治後半に東京、そして同時期には大阪で相次いで開業していたが、昭和期の大阪は、それ以前の大正期のカフェと比べて、かなり異なった雰囲気を醸し出していた。近世以来から栄えていた芝居小屋、あるいは演芸場とともに、多くの飲食店が軒を連ね、歓楽街として賑わっていた道頓堀を中心とした一帯は、大正から昭和にかけて大きく様変わりをしてしようとしていた。

カフェが初めて大阪・道頓堀に出現したのは大正 5（1916）年で、その店の名前は「カフェー サンライズ」と言い、アメリカ帰りの山岡が経営者として、ブラジルコーヒーの宣伝のため開業したとされている（片山 1952: 62）。その後、道頓堀には小堀勝蔵を経営者としたカフェ、「ユニオン」が誕生する。ユニオンの登場は画期的であった。その独創性はダンスホールを併置し、二階を板敷きに改造し、ジャズバンドを雇い入れ演奏させたことにある。ダンスホールでは社交ダンスが行われて人気を集め、同時に女給には錦紗の衣装を着せたことで評判になり、この流行が大阪でのカフェの乱立を招く原因になった（片山 1952: 64）。昭和初期に至ると、カフェ文化は新しい風



図 12 絵葉書「劇場並ぶ道頓堀の賑ひ」

諸・國・漫・遊・(大)大阪道頓堀の夜景

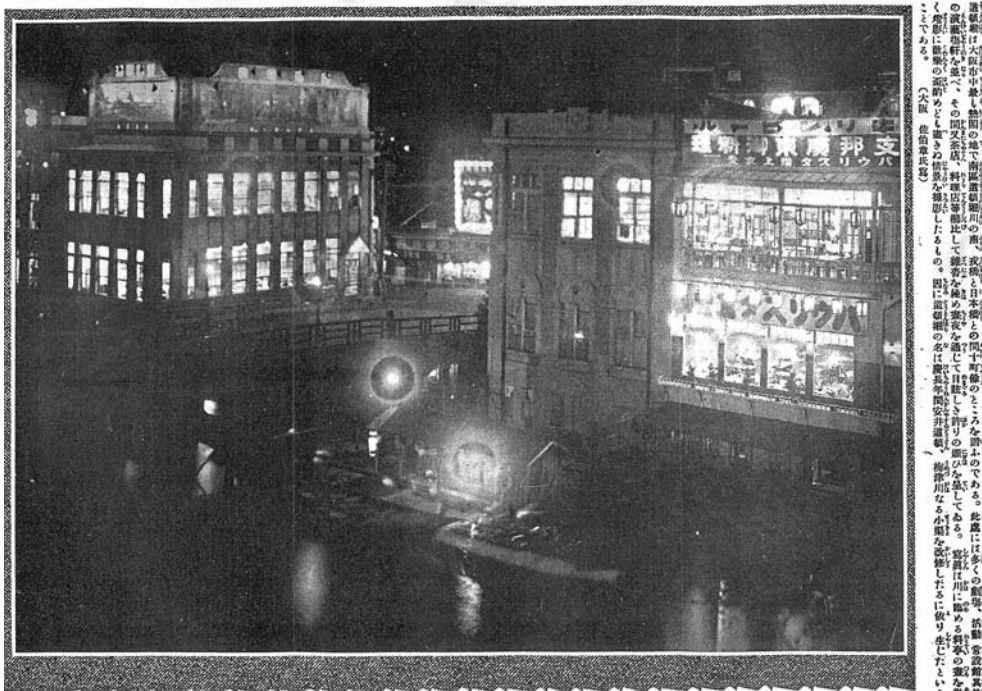


図 13 道頓堀の夜景

出典：『歴史写真』155号、大正15年6月号：口絵写真。

俗としての装いをこらして全盛期を迎え、その繁栄はひと際目立つようになっていったのである。

カフェの許認可権を持つ大阪府警は、その動向について厳しい視線を向けていた。とりわけ、カフェ内で、そしてダンスホール内でさえ、男女が身体を接触させて踊る社交ダンスは性風俗の観点から卑猥な行為と判断し、昭和4年には警察署長命令により厳しい営業規制を実施し、風紀上の取締りを行うようになる。その後、昭和13年3月に大阪府は「料理屋飲食店営業取締規則」を制定し、カフェを「特殊飲食店」と定義するに至った。その規則は「府令第16号」で公表されていて、その定義とは「洋風の設備を有し婦女をして客の接待に当たらしめ飲食物を供するもの」（大阪府警察史編集委員会1972:627）であった。もちろん、その制定の真の狙いは、性風俗の厳格な監視を警察当局に負わせることにあった。

街路の風景も一変した。街並みはネオンサインで煌々と照らされ、道行く人のは群れは当時の流行歌、「道頓堀小唄」に耳をそばだてていた（図12、13）。明治期、そして大正期のカフェはおお

よそのところ洋食屋を営んでいたが、昭和期になると歓楽の色彩をいっそう強め、むしろ今でいうキャバレーと呼んだ方がふさわしい存在に変貌していく。カフェの中に入ると、そこは昼間の世界とは異なった別天地が待ち受けていた。第一、カフェは接客を業務とする「女給」と呼ばれる女性が主人公であった。酒食を共にしながらの女給との派手な交際、こうした光景は昭和期のカフェの一般的な特徴として多くの著作では語られている。なかでも、新聞記者であった経験から村嶋は現下の世相を詳しく観察し、このカフェが作り出した世情を冷静に言い当てている（村嶋1931〈2004:40〉）。

カフェは刺激の凝固である。その装飾のあくどさ、その照明の明るさ暗さ、その飲料の強烈さ、更に、サービスする女給のエロ100%なるに至っては、カフェは遂に単なるカフェでは断じてない。

女給はカフェ、バーの女王である。客の大部分は洋食そのものよりもこの女王の美味に

満喫しようとして此処に通って来るのだ。

先に紹介した大正8年に刊行された『道頓堀』創刊号では、カフェは二類型、「食物本位」のカフェと「給仕女本位」のカフェに分かれた、そこで働く給仕もそれぞれ役割が異なるとされていた。この村嶋の面前に現れたカフェは、その二分類では「給仕女本位」に位置づけられる。大正期にはカフェは多様な形態をしていたが、昭和期のカフェは「エロ百%」であって、もはや文士らの集う「単なるカフェー」では「断じてない」ことになる。女給（女ボーイ）は「カフェー、バーの女王」であり、村嶋がそこに見たのは、「洋食そのものよりもこの女王の美味に満喫」する客たちであった。村嶋のこの数行の文言のなかには、大正中期から昭和初期の間、わずか十年足らずのうちで大阪歓楽街の様変わった姿を読み取ることができる。大阪府警もこの変化を正確に把握していた。「昭和二年春に〈赤玉〉が生まれ、飲食本位のカフェーから女給のサービスの主とするカフェーに変わり、いわゆる〈女給時代〉を現出した」と指摘している（大阪府警察史編集委員会 1972: 624）。このカフェ赤玉については、後に詳述することになる。

大正期には洋食を求めてカフェに来る人が相当数いたし、パノンの総支配人はフランス料理を自慢げに提供していた。ところが、村嶋が遭遇した現実、カフェを訪れる人たちの来店目的の変化であった。いや、正しく言えば、変化したのは「料理本位」カフェの衰退であって、村嶋の言葉にある「カフェー、バーの女王」という言葉にこそ、この時代の特徴のすべてが言い表されている。女給自体の性格が変化したのである。顧客の男が女給にセクシャリティの発露を求めるようになったのか、それとも女給自身がセクシャリティ表現に市場価値を見出したのか、多様な解釈が可能だが、おそらくはこの両者が相乗効果を生み出し、昭和のカフェ時代を築いていったと解釈する方が適切である。客が女給へ向ける眼差し、女給が誘発する色情感覚、これらの視線が交錯するなかで、エロ志向への転換が行われたことになる。

そのほかにも、この時期には至る所でカフェを取り巻く環境は変化している。建物の外観のみな



図14 カフェ・ユニオンの宣伝ポスター
日露戦争後27年と書かれているからこのポスターは1932年頃の制作と思われる。洋装女性の接待で、安いチップが売物であった。

らず、室内空間でも装飾過多の現象は起きている。有力カフェは競って室内環境、例えば椅子やテーブル、さらに照明機材や方法などに配慮した設計を採用していく。図10で見た、呉市を訪れ女給と閑談する菊池寛の姿はまさに昭和の時代を表現している。道頓堀のパノンの室内装飾もさびやかである。「ステンドグラスの窓や、入口の天鵝絨の重いリード、淡紅色の壁面にはビヤズレーの版画がかけられ、ピンク色の卓に黒い椅子、川沿いの濃緑のソファからは——」（鶴丸 1932: 41）というように、カフェ内部を魅力ある設備で満たすようになる。パウリスタでは、「全壁面に鏡を張り、卓は大理石で籐椅子をならべた」（篠崎 1954: 175）というように、室内を豪華な設備で整えた。三田純一の紹介でも、「入口には自動ピアノをおき」というように、最先端の光景が展開していた（三田 1978: 248）。

こうした派手な見てくれ競争は、女給のファッションにも影響を及ぼしていった。他店との営業

競争に打ち勝つためには、それなりの努力が必要である。女給は接客業のプロでなければならないし、それなりのファッションにも配慮しなければいけなくなった。例えば、ユニオンを例に挙げればよい。このユニオンはパノンの廃業後、その跡地に新規開店してできたカフェで、周辺カフェに対抗意識を燃やしていた。多くの来客を期待して、「数多くの若い女性を集め、洋装で対抗し、バーテンダーもすべて断髪洋風美人」（篠崎 1954: 176）であった（図 14 参照）。

村嶋が「刺激の凝固」という感情を激しく揺さぶる表現で話題を投げかけた対象は、この、新たに登場した昭和のカフェであって、とりわけ大阪の南地、道頓堀のカフェである。そこには「美人座」と「赤玉」という大規模な施設を誇る二軒のカフェが、互いに覇を争うように意識しあって、道頓堀を挟んで対峙していた。この二大カフェこそは昭和初期を彩るカフェ文化の花形であって、両者は意地を張るように客の呼び込み合戦に熱中していた。その作戦は派手であった⁷⁾。

後に作家として名をなした織田作之助は、若い時分は学業をさぼり落第を経験した強者であった。その織田が 24 歳の頃、時期はまさに昭和 11 年、ある女性に恋して道頓堀周辺を彷徨っていたことがあった。織田は、ある日の夜、見聞した風情を印象的に書き留めている（織田 2004: 157）。

赤玉が屋上にムーラン・ルージュをつけて道頓堀の夜空を赤く青く染めると、美人座では二階の窓に拡声機をつけて、〈道頓堀行進曲〉、〈僕の青春〉、〈東京ラブソディ〉などの運葉なメロディを戎橋を往き来する人々の耳へひっきりなしに流していた。

その悪どいまでの宣伝合戦に織田作之助は辟易していたようである。実際に美人座は、くどいほどの宣伝に長けていて、大音量で流行歌を流し、注目を浴びようとしていた。そのため、流行歌として口ずさまれていた演歌、「道頓堀の行進曲」の人気に便乗し、派手な立ち居振る舞いで並み居

る人々の歓心を誘う作戦に出た。当時の流行歌、「道頓堀の行進曲」のメロディは大衆受けをするほど多くの人々に親しまれていた。その歌詞も抒情を誘う内容であった（中京ハーモニカ研究所編 1928: 8）。

赤い灯 青い灯 道頓堀の／ 川面にあつま
る恋の灯に／ 何でカフェが忘らりよか。
酔ふてくだまきやあばずれ女／ すまし顔す
りやカフェの女王／ 道頓堀が忘らりよか
好きな彼の人もう来る時分／ ナフキンたた
もよ唄ひませうよ／ ああなつかしの道頓堀
よ

カフェの宣伝方法としては新聞広告が常套手段であるが、拡声器を鳴らしての派手な立ち回りは道頓堀ならではの現象である。カフェの宣伝手段としては、そのほか身近な素材としてはマッチ箱がある。多くの場合、製作年代、製作者名が不明とはいえ、その表に描かれたデザインの見事さによって、マッチ箱のラベルはカフェの知名度を上げるのに効果的である。その例として、美人座が宣伝用として利用したマッチの図柄を示してみたい（図 15）。この美人座のデザインは、拡声器のうなり声とは対照的に、抑制のきいた物静かな古典的な日本美人である。表通りでは耳目を集める行進曲で通行人の耳を圧倒すれば、店内の来客に対しては垢抜けした美人女性を印象づけ、カフェの好感度を高める作戦に出ていたとも解釈できる。このデザインは、美人座の存在を浸透させるのにより評判を植えたことになる。

美人座の開店は昭和 2 年で、一説によると明治 29 年生まれの子永菊雄が創業者と言われている（太田 1935: 109）。設立後、またたく間に美人座は事業規模を拡大し、各地に支店を立ち上げていくが、大阪市内で発刊された各種の「電話番号簿」を検索していくと、複雑な人間関係が立ち現れる。昭和 5 年 2 月現在、「美人座」は大阪の北区（曾根崎新地）と南区の二か所にあって、しかも同じ杉山姓が開業していた。同年 4 月には北区

7) 道頓堀の歓楽街の風景は、橋爪紳也（2003 b）、橋爪節也（2005）が『道頓堀』に描かれたイラストをもとに街並みを復元し、解説つきで紹介している。これと関連して、橋爪紳也（1996）は大阪心斎橋の歴史的光景を知るのに適切である。



①



②



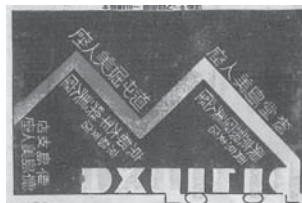
③



④



⑤



⑥



⑦



⑧



⑨

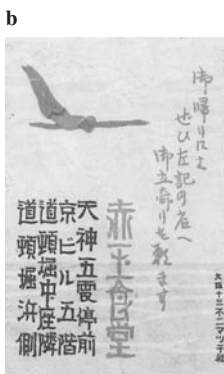


⑩

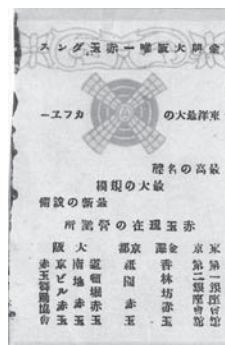


⑪

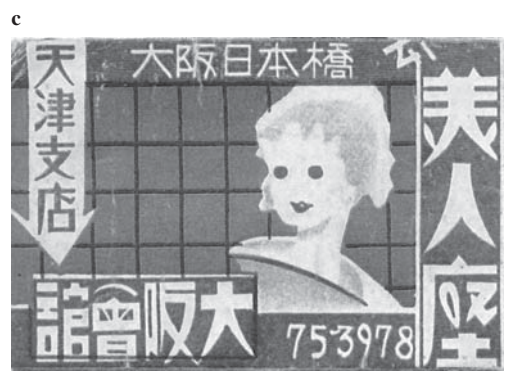
a



⑫



⑬



⑭

図 15 a マッチラベル：美人座 (①-⑪)

b マッチラベル：赤玉 (⑫-⑬)

c マッチラベル：中国・天津の美人座⑭

表 1 美人座および赤玉の経営者、所在地

年月日	赤玉			美人座					
	店（支店）名	経営者名	所在地	店名	経営者名	所在地	店名	経営者名	所在地
①昭和2年11月10日	赤玉（食堂）	榎本正	南区西櫓						
②昭和5年2月10日	天五本店 日本料理部 京ビル支店 道頓堀支店 南地支店 赤玉会館	榎本正	北区天神橋 北区天神橋 西区京町 南区西櫓 南区西櫓 南区難波新地	美人座	杉山市一	南区高津	美人座	杉山敏雄	北区曾根崎新地
③昭和5年7月26日	赤玉食堂事務所 天神五本店 京ビル支店 道頓堀支店 南地支店	榎本正	南区笠屋 北区天神橋 西区京町 南区西櫓 南区西櫓	美人座事務所	杉山正人	南区南炭屋	美人座	糸永菊雄	北区曾根崎新地
④昭和7年12月15日	赤玉食堂事務所 京ビル支店 道頓堀支店 南地支店	榎本正	南区笠屋 西区京町 南区西櫓 南区西櫓	美人座事務所 美人座総本店 美人座日本橋支店	杉山正人 杉山正人 杉山正人	南区炭屋 南区炭屋 南区日本橋	堂島総本店 桜川支店	糸永菊雄 糸永菊雄	北区曾根崎新地 西区幸
⑤昭和9年11月25日	道頓堀本店 銀座会館大阪支店	榎本正 榎本明三	南区西櫓 南区心斎橋	杉山正人事務所 日本橋支店	杉山正人 杉山正人	南区炭屋 南区日本橋	堂島総本店	糸永菊雄	北区曾根崎新地
⑥昭和10年6月5日	道頓堀本店	榎本正	南区西櫓	美人座事務所 日本橋支店	杉山正人 杉山正人	南区南炭屋 南区日本橋	堂島総本店	糸永菊雄	北区曾根崎
⑦昭和11年12月1日	キャバレー赤玉 キャバレー赤玉 グランドパレス	—— —— 榎本美知夫	南区笠屋 南区西櫓 南区西櫓	日本橋支店	——	南区日本橋			
⑧昭和12年3月10日	キャバレー赤玉 キャバレー赤玉 銀座会館大阪支店	—— —— ——	南区笠屋 南区西櫓 南区心斎橋	日本橋支店	杉山正人	南区日本橋			
⑨昭和15年1月20日	赤玉営業事務所 キャバレー赤玉 グランドパレス メトロポリタン 銀座会館大阪支店	—— —— 榎本美知夫 榎本正	南区久左衛門 南区西櫓 南区西櫓 南区宗右衛門	日本橋支店	杉山正人	南区日本橋			

出典：この表は大阪府立図書館（中之島）所蔵の各種「電話番号簿」を基に作成した。表の左欄は、その奥付の年月日である。

この年月日をもとに、末尾の「引用文献」の「附」と照合すれば、引用した「電話番号簿」の表題が分かる。

は糸永菊雄（「堂島総本店」）、南区には杉山正人（「美人座事務所」）が経営者になり、昭和7年以降は、それぞれ糸永と杉山の経営するカフェになる。ただし電話帳の記載は、両者とも「美人座」である（表1参照）。「美人」を冠したカフェ、例えば「美人軒」などは大阪にいくらかあるし、また「美人座」を名乗るストリップ劇場が東京にはあったが、ここで問題にしている「美人座」はこの二つの「美人座」である。説明が冗長になったが、これも記述の混乱を防ぐためである。

道頓堀は大阪は日本でも有数な歓楽街だけあって多くの案内書が刊行されていて、岸本水府の著作、『京阪神盛り場風景』（昭和7年、盛文堂）もそのうちの一冊である。この案内書のなかには美人座についての記述があり、昭和6年1月現在の資料と断りつつ、「道頓堀美人座」と並んで「本

美人座会館（新築中）」と、二か所の美人座が列挙されている（岸本1932:24-26）。この道頓堀美人座は堂島総本店の系列とされ、本美人座とは別経営と言うが、それ以上の情報は出していない。けれども酒井潔（2014:26）によれば、この二つの系統、「道頓堀美人座」と「本美人座」とは東京進出に際して本家争いをしていたことになる（46ページ参照）。だが、それは、同根ということであろう。それゆえ、電話帳が両者をともに「美人座」と記載しているのに従い、ここでは同一系統に属すということで、断りのない限り「美人座」として一括して記述していくことにする。

この美人座の名前を持つカフェは、日本中に支店を展開しているだけに相等数に達している。マッチ箱のデザインに刻まれた店名は数多い。図15に表示されたマッチラベルを参照してみると、

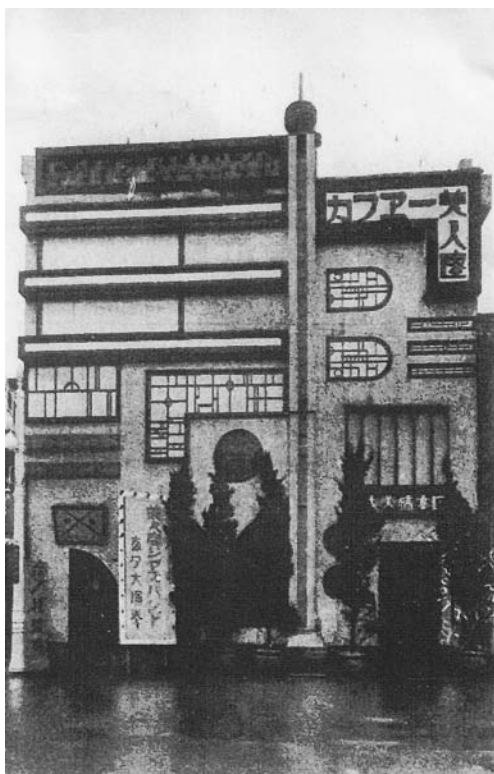


図 16 カフェ美人座外観
 (「美人座ジャズバンド」の看板が出ている)。
 出典：高橋 1931 : 23。

「本店 堂島美人座」のほか、美人座を名乗るカフェは京都、東京、岡山、金沢、徳島、長崎にまで及んでいて、マッチ箱という断片的な情報を通してみただけでも、日本のカフェ業界で重責を担っていたのを確認できる。

美人座の発展を支えた基盤が堅実であった理由は、経営の問題以外に従業員の福祉、娯楽にも関与していたことにも求められる。「クロネコ本美人座」が、「観菊会」と称して世界各国の大使を招いてダンスパーティを開催したことは、後ほどに紹介することになる(図 23 参照)。さらにマッチラベルから知ることができる事柄としては、「本美人座」は「ルーフゴルフ園」を開設し、従業員のゴルフ対抗戦をおこなっていたことである。注目を引きつける活動としては、映画などの企画に参加し、知名度の向上をもくろんでいたことも忘れてはいけない。

興味深い話はまだ続く。昭和 4 年、勝美庸太郎プロダクションは「美人座」という題名の映画を

製作している。その企画の発案者は分らないが、美人座の経営者は実業家としての能力にたけていた、と判断できる。映画の原作・脚色は八田尚之、主演は勝美庸太郎が演じ、四月に大阪の南座で封切されている。この作品の特徴は美人座に実際に所属する舞踊団とジャズバンドが参加し、加えてフィリピンのジャズバンドの実演もあったことである。その映画では多くの殺し文句が飛び交い、「カフェ・レビュー」の演出は際立っていた。舞台そのものとなった道頓堀界隈は鳴りやまないジャズの音響で人々に刺激を与え続けていた。このジャズの流行に合わせ、「赤い灯、青い灯」のメロディが流れ、映画の世界におけるレビューの演出と重なり、道頓堀一帯のカフェは、まさに歓楽郷の極致をなしていたのである。享楽の世界に浸りきった楽園に飛び交う賑わいの光景は川柳としても残されている(岸本 1932 : 24)。

「内々の握手をよそにジャズが鳴り」

「メンバーはジャズに合した手振なり」

こうした歓楽郷の道頓堀の中心的位置に美人座が位置していたことを経営者は心得ていて、最新の流行に敏感であった。実際の美人座の姿を映画の中に登場させ、カフェの宣伝にも利用していたほどで、その戦術は見事であった。館内に響き渡るジャズの音色、それを背景にした実存するカフェ美人座の映しこみ、映画を宣伝活動の一環として利用した美人座経営者の才覚は豊かであった。考えてみれば、銀幕(スクリーン)に美人座を映し出し、人々の興趣を視覚を通して植え付けるには、映画ほど好都合な宣伝媒体はなかった。

映画のあらすじは美人座の女給、不二子をめぐって起こる恋の狂騒曲である。不二子にはドラム演奏者の夫がいるが、それとは知らずに若きスポーツマンが不二子に恋心を抱くという内容で、その筋書きは平凡である(著者不詳 d 1939)。だが、銀幕に現実の美人座を映し出したことで、巷での認知度が高まるという結果を生んだことは間違いない。ジャズを奏でる美人座の可視化、これこそが観客に強いメッセージを残したようであって、大阪カフェ文化の絶頂期を誇示するに十分な主役でもあった。

表 2 企業納税額一覧表

企業等名称	業種名	営業収益税額 円
旅館、料理、飲食業（一般料理）		
丸水楼	料理業	187
北菱富	料理業	165
鮎乃茶屋	鮎割烹料理業	211
丸万本家	料理業	334
小里重松	鮎割烹料理業	161
二鶴	料理屋	178
乾御代子	料理	237
寺久乃屋	即席日本料理	212
三島亭	牛肉すき焼き・懷石料理	275
三宅総本店	精肉及料理	443
今福	天婦羅料理	347
菊屋	天婦羅・鮮魚	230
天狗楼	海魚・折詰、会席精進各料理	180
いずもや（合名会社）	鰻料理、海魚料理	360
いずもや（吉田栄次郎）	鰻まむし、海川料理	217
いずもや（合資会社）	鰻まむし、海川料理	560
柴藤	鰻料理	290
ヴィナス喫茶店	喫茶、サロン、宴会場	117
新京宴会場壽屋	欧風料理、喫茶、食料品、和洋たばこ	51
弘得社スエヒロ北陽軒	肉すき焼き、西洋料理、酒場	151
キャバレー赤玉	カフェ	(記載なし)
キャバレー新町食堂	和洋料理カフェー	70
大阪ユニオン	カフェー	670
合資会社 美人座	カフェー	360
興業・娯楽場		
北港潮湯株式会社		329
ルナパーク演芸株式会社		230
松竹キネマ大阪支店		4,733
米田合名会社		1,086
帝国キネマ演芸（株）		206
噴泉浴場（株）		1,091

出典：大阪商工会議所 1933：658-668。

注：「旅館、料理、飲食業（一般料理）」の部には 60 軒記載があり、「平均営業収益税額」の単純平均は 149.8 円である。この表では平均以上の企業名を挙げておいた。

カフェ関連としては 7 件が表示されている。参考までに「興業・娯楽場」関連も記した。

ここでのカフェとは、法令「特殊飲食店営業取締規則」に基づく分類ではなく、通俗的な用法、すなわちサロン、キャバレー、時には西洋料理店も含む広義概念である。

昭和初期の美人座が繁栄し、営業成績がずば抜けて高った証拠は、納税記録に高額納税者として記載されていた事実から確認できる。昭和 8 年改正の『大阪商工名録』に記載された営業収益税額は極めて高額である（大阪商工会議所 1933）。その出版物には、「大阪市ニ於テ昭和七年度営業収益税」を納入したすべての業種とその納税額が記載されている。業種分類は詳細になされていて、大分類として例えば「旅館、料理、飲食業」の項目が設定され、さらにその下位区分として分類さ

れた「一般料理」のなかで、カフェは「割烹料理業」、「天婦羅料理」「鰻料理」、「日本料理」など一括されて記載されている。この「一般料理」には 60 軒が記載され、「営業収益税額」の最高は、社交ダンスの拠点でもあった「大阪ユニオン合資会社」の 670 円である。60 軒の平均は 149.8 円であって、美人座は平均を大きく上回り 360 円であった（表 2）。

この大分類には「興業、娯楽場」も加えられていて、その分類に属す「松竹キネマ」は想像通り

群を抜いて巨額である。とはいっても、美人座もまた相当高額の納税者であることに変わりはない。赤玉の金額記載はないのが不思議であるが、東京側の営業所が納税していた可能性は高い。いずれにしても、大阪有数の観光名所として名高い「ルナパーク演芸」を抜いて、美人座の納税額が高額であるのは、入場者数が多数に上っていたことを証拠づけている。それだけ美人座の人気は桁外れに高かったのであり、大阪の、いや日本での消費活動に占めるカフェの存在の大きさをあらためて知ることができる。

美人座と対比して語られるカフェ「赤玉」、その経営の最高責任者の榎本正も栄光を背負ってカフェ業界を歩んできた人物である（表1）。その活動を遡ってみると、大正14年に大阪北区で「天神五赤玉」という名称の料理店を開業した時から始まる。明治28年生まれの榎本は才気活発な青年で、時代の求める娯楽に敏感であった。その才能をもとに事業の拡大に命運をかけ、大正15年になると「赤玉食堂」を開いたところ成功を収め、やがて各地に支店を設けるまでになり、ついには東京にまで進出する。とりわけ東京での営業は多額の収益を生み出し、世間から「カフェー王」と呼ばれるようになる。実際に榎本は東京府多額納税者となり、知名度は格段に上昇した（太田1935:9）。

榎本正の辿った一生は立身出世の典型例であるだけに、当然のように今までに多くの評伝が書かれてきた。達成した業績の数々から注目を浴び、「カフェー王」とまで賛辞を贈られ、業界紙を通して活動の華々しさが紹介されてきた。その成功譚はある種の武勲談の印象さえ与えている。それだから、榎本に関する記事は多数にのぼっていて、近年では野口孝一が論考を発表し、小規模の飲食店経営から出発しカフェー王に昇りつめていくまでの過程を詳細に論じている。榎本にかかわる資料はほぼ野口の論文には検討対象として収められていて（野口2018:132）、その功績は大としなければいけないが、榎本が起業家になる直前の、大正中期の大阪モダニズムとの関連が説明されているわけではない。榎本がいかに独創的な人間であるにしても、既成の社会的慣行のなかにヒントを得ているはずで、その関わりを考えておく

必要があろうかと思う。榎本の発想を生み出した基盤には何があったのであろうか。

4 美人座と赤玉：歓楽街の王者

大正期から昭和の初めにかけての東京のカフェはヨーロッパ的な風情を漂わせていて、文士たちの集いの場所であった。しかしながら、この時期に大阪系のカフェが東京、それも主に銀座へ進出していくことによって変貌を遂げていく。この変貌ぶりを安藤更生は見事に文章として書き留めていた。民衆の生活誌の記述に大いに貢献した安藤は、大阪系と東京系の文化の違いを総評し、「東京の文化は観念的であり、インテリクであるのに反して、大阪文化はまったく生活文化である」と言う。その生活文化としてのカフェが銀座に進出したことで、カフェの風情も大いに变化したというのが安藤の観察であった。結論を先取りして言えば、こうである（安藤1977:116）。

銀座は今や大阪カフェ、大阪娘、大阪エロの洪水である。大阪カフェの特色はまず第一にエロだ。大阪女給はエロ工場での熟練工である。——それともう一つの特徴は大衆性にある。——大阪カフェの空気は全くインテリク性を没却している。——大阪のカフェはしる粉屋や三好野へはいるのと同じ気持ちではいれるのだ。

安藤と同様な視点は松崎天民にも見ることができる。大正12（1923）年の関東大震災までは貴族的、あるいは富豪的な雰囲気があったが、復興後の銀座は「何となく大衆的になり、何となく一般的に」なったと述懐し、女給に魅力のあるのは「銀座に巣くうて居る女達の発酵素」に求めている（松崎2002:256）。「発酵素」とは、もちろん大阪系カフェの女給がもたらしたエロ風情と考えてよい。

こうして、昭和期の銀座カフェ街は、大阪系カフェの占拠する歓楽街へと変貌していく。その中心的位置を占めていたのが、美人座であり、また赤玉であった。まずは赤玉を先に取り上げてみたい。榎本の経営する赤玉が東京へ進出した際、

「銀座会館」を名乗るようになるが、この「赤玉」の誕生から「銀座会館」に至るまでの榎本の軌跡を追ってみることから出発してみたい。

榎本は、困窮した青少年期、夢を抱いた壮年期、王道を極めた熟年期というように、それぞれの時代の要請に応じながら成長し、頂点を極めた、いわば立身出世の典型例として称賛されるのが普通である。青少年期の榎本は、生活苦のため苦労が多かったようである。中学時代には相場師だった父親が他界したため、母が生計を支えていた。そのため、どん底の生活に落ちてしまい、わずかな遺産で母親と大阪・天神橋で旅館業を開いていたこともあった。「カフェー王」としての道は、こうした経験を経てからのことである。成人した後の榎本は進取の気性を武器に新しい世界へと飛び込んでいく。従来の「お茶屋」商売から離れ、大衆的な接客業を模索していた榎本の脳裏に浮かんできたのは、カフェの経営であった。

大正14年、榎本が31歳の時、知人とともにカフェの共同経営を始める。榎本の着眼点の鋭さはすぐに発揮された。内装や設備に工夫を凝らし、大理石のテーブルを配置して室内装飾を整え、それまでのエプロンかけの安っぽい衣装を廃止し、錦紗の着物で飾ることで女給の容姿に改革を求めた。この改革は、大阪人に異様な新鮮さを感じさせたようである。「派手に陽気に、色電球、大理石のテーブル、当時であって此の思ひきつて大胆な設備と宣伝は、白熱的な人気を博した。每晚満員満員の盛況で稀有の大当たりを続けた」（登尾1935:418）というから、榎本の着眼点の良さは申し分がない。この成功をもとに照準を定めたのは、大阪随一の繁華街、道頓堀への進軍である。ここに建てた豪華なカフェ、これがカフェ「赤玉食堂」であった。

大正15年、道頓堀に造られた赤玉食堂は、今までのカフェの常識を破り、二階建てとし、その二階にはボックス席を用意し、40人の女給を擁した。この赤玉は物珍しさもあって人気を呼び、女給一人の持番が一日40人、その収入は必ず抜けて日給は60円から100円とも言われたから、大成功であった。昭和3年には、その隣の芝居茶屋を買収し「赤玉ダンス場」を建て、二組のジャズバンド、14、5人のダンサーを雇い、カフェー

界に新風を吹き込んだ（清水1931:27-28）。事業の拡大はさらに続く。その年12月には大阪西区に「京ビル赤玉」を設立し、業界における確固とした地位を築いた。その後も「赤玉」の好景気は続き、東京に進出し、昭和7年12月には「キャバレー赤玉」を開店し、「大キャバレー時代来る」と自慢高々に謳い上げる。開店祝賀の当日には、「世界に誇る国際的大社交場」と自賛しつつ、専属の「赤玉大音楽隊」ばかりでなく、特別招聘した「東京タンゴバンド」の演奏で場内の雰囲気



a



b

図17 絵葉書 a:「銀座会館」 銀座の不夜城と豪語している。
絵葉書 b:銀座会館の姉妹カフェ 行楽の秋に適した謳い文句が詩情を誘う。

盛り上げた（『大阪毎日新聞』昭和7年12月25日）。

これよりやや先、榎本正は新たな出先店を求めて、昭和5年11月には東京の銀座に店舗を構えていた。これが銀座会館である（図17a、17b）。ついで、「第二銀座会館」を建て、昭和7年9月には「銀座パレス」を開店させている（石角1936:50）榎本は企業家としての先見性を持って実行に移していったが、こうした派手な活動の裏には、目先の些細のことにも配慮を怠らない性格のきめ細やかさがあった。大阪でカフェ赤玉を開業した時、「引越しそばの替りに、五円のコーヒー券をそこら一帯に配って廻った」（石角1936:52）という逸話も残されている。これは、宣伝上手な榎本の戦略であったが、気配り上手な性格が出ている。こうした性格だから、仕入れについて料理人の監督を怠らず、子細な事柄にも気を配っていた。

飛ぶ鳥を落とす勢いがあった榎本は、その拡大作戦の実行に当たっては派手な演出を試みている。まず第一に、女給の募集は半端な数には収まらなかった。募集人員は三百人、月収二百円と景気のいい、破天荒な企てで東京都民を驚かせた（石浜1930:75）。次に、カフェの外観である。壮大な建造物は人々の視線を釘付けにする。銀座会館は昭和7年に改装しているが、そのカフェの外観は眼を瞠るように堂々としていて圧巻で「カフェ界の巨弾電光建築 日本最初のオールネオンライト メカニズムとグラスイズムの機械的幻想大サロン完成」とその威容は他の群小カフェを

圧倒していた。（『東京日日新聞』昭和7年12月8日）という触れ込みは、東京に居並ぶ群小のカフェを尻目にして、高額納税者としての自負心から発した榎本の誇大妄想的な言葉では決してなかった。

次々と銀座パレス、銀座コンパル、メトロポリタンを開店し、銀座を制圧した榎本は、さらに事業を拡大し、余勢をかって大阪には「銀座会館大阪支店」、さらに勢いづいて金沢には「銀座会館金沢支店」を設けている。こうして最盛期には女給総数が1,200人にも上り、男使用人もまた900人を雇用したというから（宮前1935:72-73）、この派手とも思える活動が世情の注目を浴びないわけはない。とりわけ東京にあっては、「組織の巨大さと、華麗と、大阪式サービスとで、東京のカフェ界を驚愕させた」（宮前1935:72）というふうにある。

榎本の活動を改めて整理しておきたい。榎本は起業家精神に富んでいて、大胆な発想力を持っていた。カフェの設備投資を怠らず、室内設備には資金を惜しまず投入し、装飾性豊かな空間造りを行っていた。経営の面では、従来のカフェが小資本の出店にあったのに対して、榎本は企業的な見地からの規模の大きい経営を行い、かつ人的資本としての女給の衣装に拘った。そこに新鮮味があった。だが、榎本の独創性の源流はどこに求めたらよいのだろうか。この点は資料がないので推測するよりほかないが、大正期の道頓堀のカフェに源流があったのではないだろうか。再度、大正8年に発刊された『道頓堀』に掲載された記事を

図18 新聞広告に見る「銀座会館」

出典：『東京朝日新聞』昭和7年12月11日。

思い出して欲しい。その記事とは、道頓堀界隈のカフェは二種類、「食物本位」と「女ボーイ（給仕）」に分別できるという内容であった。注目されるのは、この時期に「女給仕本位」のカフェが出現しつつあったことである。前者、すなわち「食物本位」のカフェがレストランとしてのカフェであって、白いエプロンを着けた女が食事などを運ぶだけのカフェなら、後者の「女給仕本位」のカフェとはこの時代に新たに生まれ始めていたカフェである。

この両者は決定的に性格が違う。カフェを担う中核的存在は、そこで働く女給、すなわち「女ボーイ（給仕）」であるが、昭和期のカフェに必要とされる条件は、たんなる食事の運搬役ではなく、社交術を身につけた女の存在である。大正期は萌芽的段階にすぎなかったが、昭和期になると、客寄せのための人的資本として「女給」を活用したことで、カフェの歴史は新しい段階に入った、ことになる。カフェの女給になる理由を貧困に求めるという一般的に行き渡った見解にはおおむね同調するが、ただそうした経済的要因だけではなく、エロスという武器で身を固めた資本財、あるいは「エロティック・キャピタル」の活用という、女給側に立っての能動性を評価しておくべきだろう。エロティック・キャピタルとは「美しさ、セックスアピール、快活さ、着こなしのセンス、人を引き付ける魅力、社交スキル、性的魅力が組み合わさった、外見の魅力と対人的な魅力を総合」した概念である（ハキム 2012：17）。

以前の食事の「運搬係」とは違って、女給は来客と身近に接し会話をする社交人へと変貌していき、かつ社交ダンスの登場がその環境を助長していった昭和の時代では、女給に求められる役割は変化せざるを得なかった。そこに大きな問題が待ち受けていて、暗い照明の下で男女が身を寄り添っている状況は、女給の性的魅力をことさら浮き彫りにする結果をもたらしてしまう。女給が持つ「資本財」のうち、セックスアピールだけを強調すれば、あるいは強調されてしまえば、極端な状況を想定すると買売春の嫌疑がかけられてしまうからだ。社交的な女給は、実際にも「セックス・ワーカー」に陥りやすく、警察権力による規律が女給に課せられていく結果を招いてしまってい



図 19 新聞記事。「カフェは西方より」
（『大阪朝日新聞』昭和5年6月7日）の記事は、美人座などの大阪カフェ群が銀座で優位に立った、と書き立てている。銀座の老舗「タイガー」は古くなったし、元祖「プランタン」は博物館的存在として靴屋の路地裏で小さくなっている、と皮肉たっぷりな物言いである。

る。昭和期のカフェに特有な社会問題は、次号以下で論じることにした。

ここでまた、カフェ・赤玉の創始者、榎本正に返ることにする。カフェ空間の環境造りに工夫を凝らし、同時に人的資本財の活用を考えていた榎本の着眼点は画期的であった。その発想を実践したことで榎本は時代の寵児になり得たとみなすことができる。他方の美人座の状況はどうであったのであろうか。当時、赤玉と競合関係にあった美人座も、派手な振る舞いでは赤玉に負けてはいなかった。美人座は、実は赤玉より少しばかり早く東京進出を試みていた。その派手な活動は新聞紙上をおおいに賑していた。大阪のカフェ群のなかで東京進出を図った最初ではなかったが、昭和5年初夏に企てられた美人座の東京進出を『大阪朝

日新聞』は大々的に報道している。「カフェーは西方より／大阪から銀座へ」（『大阪朝日新聞』昭和5年6月7日）という見出しは、大阪資本によって打撃を受けた東京カフェ陣営の衝撃の激しさを物語っている。美人座は「純大阪風女給を二十人づゝ半月交替で出張させる」というほどの意気込みで東京での開店を果たしている⁸⁾。この年の秋頃には大阪系のカフェが銀座を席捲してしまう。「銀座を吹巻く大阪エロ／〈北〉の一带をカフェー街化する／道頓堀資本の一斉進軍」（『読売新聞』昭和5年10月20日）とは、よく言ったものである。この状況を石浜金作は「大阪カフェの東京侵略」と表現したが（石浜1930:75）、その「侵略」という表現はまさに的確であった。かつて永井荷風らが好んで通ったフランス風カフェの面影は、そこにはもはやなかった⁹⁾。

派手な演出で東京の業界を掌中に収めたとはいえ、美人座の東京進出は戦略なしに行われたわけではない。その東京進出を狙うため、糸永は実用に意周到な戦術を立てていて、マーケット・リサーチを怠ることはなかった。美人座の経営中枢にいた店主の糸永菊雄は手記を残している（糸永1931:297-299）。それによると苦労が絶えなかったようで、まるで隠密忍者のような作戦を立てて情報収集をしていた。糸永は銀座のいくつものカフェを密かに訪れ、それとなく客の出入りを観察し、そこから売上げ高を推計していた、という。店のメニューを見ながら、客が使う代金を聞き出したり、また女給一人が受け持つ客数を調べ、その消費金額を聞き出したりして店舗の収支状況を推察していたこともあった。糸永は地道に東京のカフェの経営状況を調査していたのである。

同時に糸永は、何よりも女給の接客方法に大阪と東京の差異を看取っていた。店舗の中の座席

配置が大阪と違っているのに、まずは気がついた。東京ではボックス式に仕切られ、店舗内部の全体が見通せないのに対して、大阪では開放的で、店内全体が遊興空間を醸し出すよう設計されていた。店内の掃除は、男の使用人の仕事とし、女給にはさせない大阪に対して、東京では違う方式を採用していることに糸永は驚いていた。大阪では女給は店の看板として処遇され、清掃作業などはしないのである。大阪では、客が来店するや馴染みの女給がすぐに呼び出されるし、女給は座って客に相対するのに対して、東京では立ったままであった。こうしてみると、大阪の女給はカフェの「使用人」ではなく、利潤を生み出す「資本財」と位置づけられていたことになる。実際には、女給の学歴は小学卒業者が大半を占め、女学校卒以上の高学歴者は少なく、一割程度だという報告もある（内務省警保局編1934:101）。それは事実だとしても、女給の活躍する世界は学歴が尊重される社会ではない。より多くの来客を馴染みとして確保し、顧客と疑似恋愛関係を築きあげ、この関係をもとにチップという名の報酬をより多く得ること、この戦略目的に長じていることが有能な女給の条件である。優秀な女給には、性的な魅力、社交性にたけた接客術、知識の裏付けのある会話術、こうした能力、すなわちエロティック・キャピタルが求められていたことになる。

確かに、現実にはカフェはモダンボーイなど「不良学生」の溜まり場であるとして非難されることもあった。女給を店外に連れ出し疑似恋愛を試みる、つまり「不倫」を提供する現場であるとして社会的批判を受けることもあった。こうした事柄を指摘されれば、女給に対して無造作にエロティック・キャピタルという概念を当てはめれば躊躇する向きもあろうかと思う。しかしながら、

8) ただし注釈を加えれば、後に見るように東京に進出した美人座は、大阪・道頓堀の美人座とは別経営を強調し、「本美人座」という名称を掲げて営業している。この「本美人座」については、カフェ業界の専門雑誌『クロネコ』で写真付きで紹介されていて、その写真の端には「全国本美人座チェーン」として大阪、横浜、岡山、福岡、京城、京都、神戸、金沢、熊本、広島という都市名が列挙されている。しかし、これらの都市のカフェが「美人座」を自称していたのか、それとも「本美人座」を自称していたのか、はつきりとはしない。いずれにしても、両者は同根であり、ここでは大きくくくりとしては「美人座」と記述していく。

なお、「美人」という名称をつけるカフェは、例えば「美人軒」、また理容院として「美人館」などがある。しかし、明らかにここで取り上げている「美人座」とは関係なく、こうした類似名称は問題にしていない。

9) ただし、大阪カフェが東京へ進出したのは美人座や赤玉が最初ではない。その少し前に、大規模な大阪カフェ、ユニオンや日輪が進出していた。

東洋一の榮冠を戴く
 本美人座東京進出
 白熱的蒲員御禮
 避暑地行断然中止!!
 クロネコの神楽殿
 冷たい! 銀座の龍
 北極光の底をゆく
 人魚は眺るよ
 銀座クロネコ 本美人座
 本印大水車街下町銀座
 各店 本・新・大・小・中・大・小
 所在地 本・新・大・小・中・大・小
 ソシアル・レデー(女給) 募集

図 20 銀座クロネコ 本美人座の広告
 出典：『読売新聞』昭和7年7月30日。

大正期から昭和初期にかけ、アメリカ文化の影響のもとで新たな消費文化が勃興した時、その代表的な存在がカフェであったことを考えれば、カフェ、ならびに女給に対しての新しい認識が必要になろうと思う。美人座や赤玉が高額納税者であったことを紹介しておいたが、今風に言えば GDP (国内総生産) のうち、少なからぬ割合で貢献していたこととなり、この新しい時代の消費文化の意義を評価しておく必要がある。

さらに美人座について話題を提供しよう。美人座の東京進出にあたって、カフェの立地場所に至るまで東京の事情を探索していた努力はやがて報われることができた。その出発点となった試みは、経営不振のしかるべきカフェを探し出し、買取作戦を練ることであった。ちなみに赤玉の榎本正が「銀座会館」を興したのは同年11月であったので、その買取時期はわずかに早く、時は昭和5年6月であった。美人座は、結果的には銀座二丁目で開店していたカフェ、クロネコの買取に成功する。名称を「銀座クロネコ 本美人座」と名乗り、こうして東京での拠点作りに勝利を収めた。この時の美人座の戦略は、女給を「ソシアル・レデー」と位置づけることにあった(図20参照)。このソシアル・レデーなる用語は、まさに「エロティック・キャピタル」の概念に通底していて、女給は社交術、性的魅力、ファッション性を具備する存在として位置づけられたことになる。しかしながら、この概念は大いなる矛盾をはらんでいた。このうちの社交術やファッション性を強調すると、人気を高めるので収益の増加につながり、一方、性的魅力を強調しすぎると当時の性倫理に抵触し、社会問題を引き起こしてしまう

わけで、この難題をカフェや女給は背負い込むことになる。

昭和期のカフェと女給のはらむ問題は、この両極を揺れ動くことで、エロ・グロ・ナンセンスの風潮が充満していた時期では、ややもするとカフェには逸脱性の烙印が押されてしまい、そこで働く女給の受ける社会的評価も貶められてしまう。さらに、次回で触れるように、女給の雇傭にも悪辣な関係が発生していて、社会問題化していた事実は無視できない。その一方で、こうした時代の仕掛けを心得て、世渡り上手に上昇気流に乗れば、社会的成功を首尾よく掌中にするのが可能になる。美人座は時代の成功者だったのである。

さて、ここで美人座によって買取される以前のクロネコについて認識を深めていきたい。その開業は昭和2年5月であるから、買取されるまでの営業期間は3年ほどにすぎなかった。短期間とはいえ、当時のクロネコは明治期の面影を残していて、文人たちの憩いの場を標榜するカフェとして知られていた。毎日オーケストラ演奏が行われていると新聞広告には紹介され、西欧的カフェの雰囲気や漂わせていた(『読売新聞』昭和2年5月30日)。作家、画家、評論家など文人たちの社交場であると高揚した意識を持ち、情報交換のための機関紙として雑誌『クロネコ』を発刊していて、立ち上る熱気が充満していたカフェであった。三号雑誌で終わったとはいえ、その雑誌に掲載された店内のスケッチ画(図21)を見ると、フランスのカフェを目標に置いていたとの印象を強く受ける。創刊号には「近時流行の社交ダンスに対するご感想」を特集し、数行の感想文であるにしても、岡本かの子、萩原朔太郎、新居格、西



図 21 『クロネコ』 創刊号の表紙と内部の光景（挿絵）

城八十、南部修太朗など歌人、漫画家、詩人、劇作家、評論家などの意見を掲載し、時流に敏感なところを覗かせている。岡本かの子は「一日の生活のしこりを解くものとして結構」と言えば、萩原朔太郎も「社交ダンスは、文明社会に於て必ず必要」と理解を示す一方、日本で流行している社交ダンスは「気障で鼻もちならぬ悪趣味」と一蹴する（著者不詳 c 1929: 10-11）。総括すると、時世を睨んだうえでの評論に得難いユニークさが込められた雑誌であった。ただし、当時の世相の動向にクロネコがまったく影響されなかったわけではなく、後で見るように永井荷風のように嫌悪感を隠そうとしない文人もいた。この創刊号に興味もたれるのは、後援者の自筆サインが掲載されていることである（図 22 参照）。萩原朔太郎など著名人のサインがあるが、ほとんどは無名人で、そのことがかえって若手文人たちのサロンの場だと主張しているように見える。しかしながら、華々しく宣伝を繰り広げていたクロネコは、経営不振のため3年ほどで幕を下ろしてしまった。その後釜に登場したのが、石角によれば大阪で美人座を営んでいた杉山正人であった（石角 1936: 50-51）。先に東京進出にあたって忍者の如き情報戦を行ってきた「美人座店主」の糸永菊雄について論じておいたが、石角の論文では糸永ではなく杉山が先陣を切った印象を与えていて、両者の関係を疑問に思うかもしれない。だが、両者は同根であって、「クロネコ本美人座」を杉山が名乗った理由には、両者は対抗心を剥き出しにし

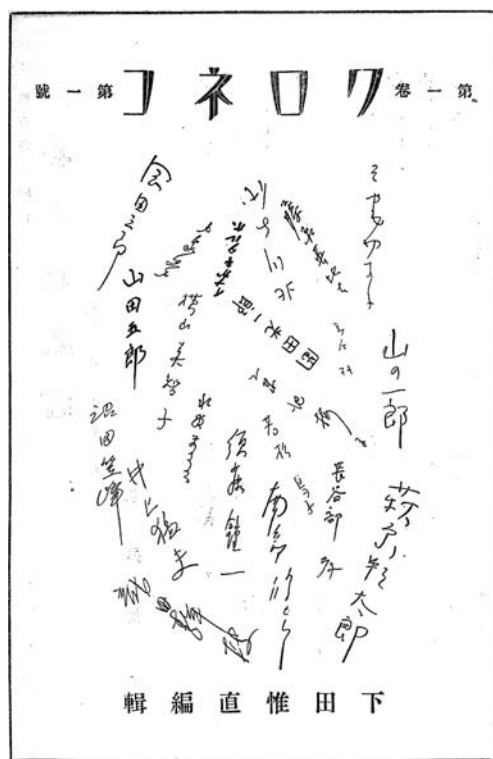


図 22 『クロネコ』 創刊号を飾った著名人のサイン

ていて、「本家」争いを演じていたことにあるようだ（酒井 2014 〈1931: 26〉）。

実際に新聞広告を見ると、両者間の確執は激しかった。一方の雄、大阪堂島に拠点を持つ「美人座」は、東京に「美人座銀座支店」を開業したことを通知している（『都新聞』昭和5年5月31日）。これに対して、他方の「美人座」は敵意を

露わにして「東京支店ナシ」と言い、「ニセモノ御注意」とまで警告を出している（『都新聞』昭和5年6月3日）。この争いに関しての事実認定は資料が限られている状況では、同時代を生きた酒井潔の証言を重視すべきであろう。「美人座」と「本美人座」とは、結局は同根ということになる（表1参照）。

東京で開店した「本美人座」は、ただの飲食店ではなく、社交場としての意義が強調されていたのは確かである。すぐ後で取り上げる永井荷風は当時のカフェに対して冷淡な態度を見せていたが、それとは対照的に当時のエロ・グロ・ナンセンスの風潮に反発するような動きも認められる。例えば、都市の歓楽街を対象として刊行された専門の情報誌、『盛り場』1巻3号（昭和7年10月）には、「菊まつり益々好評」と題した「クロネコ本美人座」の写真広告が掲載されている。そのキャプションには、「10月11日夜二十カ国の各国大公使クロネコ 本美人座の観菊会の光景」とあり、正装した男女が舞踊している光景を眼にすることができる（図23）。外交官による舞踏の場面は落ち着いた上流階級のパーティを印象づけているし、国際色豊かな雰囲気が溢れていて、エロ・グロという世界からはるかに隔絶しているのを感じさせる。だが、それは、やはり物事の一面だけを見たにすぎなかったようだ。クロネコは日常的な愛憎劇を演じるかのような、ありふれたカフェの一つでもあった。

往時のカフェ・クロネコにまつわる話について、さらに話題を提供しておく。広津和郎には『女給』という小説がある。その小説の主人公は、このクロネコに女給として勤務していた経歴を持つ小夜子（実名は山口須磨子）である。この小説は映画化されたし、また小説では広津と同時代の作家、菊池寛も大切な役割を帯びて登場している。映画と小説の舞台は、新聞紙上ではスキャンダラスな出来事として報道され、物議を醸したこともあって、クロネコは一躍、有名になった。菊池寛がかかわる経緯については、次章で詳しく論じるとして、ここでは社会現象としての側面を取り上げてみたい。『東京朝日新聞』（昭和6年3月15日）に連載された記事、「明暗近代色」の27回目は小夜子関連の内容が語られている。



図23 「クロネコ本美人座」で行われた「観菊祭」の状況

出典：『盛り場』1-3：挿絵。

浅草の劇場で落語家の金語楼とともに芝居の稽古に励む小夜子に照準を合わせた内容で、その主題は「紅の唇華やかに／女給芝居／例の『小夜子』を中心に／深夜、合唱は続く」と書かれていて、「例の〈小夜子〉」という表現から、有名人扱いされている様子が分かる。『読売新聞』（昭和6年3月11日）では、吉本興業が小夜子人気に目をつけ、出場依頼をしたという記事が出ている。このように、小夜子とカフェ・クロネコはマスコミの寵児として華々しく世間の注目を浴びていた時期があった。

その一方で、騒々しい宣伝活動に冷ややかな視線を向けていた作家がいた。すでに見てきた通り、経営が行き詰ったクロネコを買収したのは大阪・美人座系のカフェであった。大阪の繁華街で繁栄を誇っていたカフェは、東京に進出してからも派手さ、少し露骨に言えばエロ・グロ・ナンセンスの代表格として名をなしていた。だが、小説の舞台になり、映画化された状況は、懐古趣味に浸る文人には騒々しい見世物としか映らなかったようだ。その派手な情宣活動に顰蹙（ひんしゅ

く)を禁じえなかったのが、名著『墨東綺談』の作者(永井1947)であり、江戸の下町文化に情緒性を感じていた永井荷風である。荷風にとって、大阪から来たエロスに乗っ取られたクロネコは、喧噪に満ちた醜悪な姿をしているとしか映らなかった。楽隊の演奏の打ち鳴らす音響、カフェの入口には「女給小夜子」の看板、まるで見世物小屋のようだ。荷風は苛立った激しい感情をぶちまけている。当世風のカフェをグロテスクと思う荷風の気持ちが吐露された文章は、『断腸亭日記』巻15(昭和6年3月6日)に見ることができる。「悪趣味実には窮極する所を知らず」とは、荷風の発した最大限の侮蔑語であって、次なる一文には荷風の湧き出てくるばかりの心情がにじみ出ている(永井1963:12)。

昭和6年3月6日 黒猫亭に赴き女給小夜子なるものを見る、広津和郎作小説女給の主人公なる由にて目下銀座辺にて専ら高きもの、由、黒猫店口に当店女給小夜子在りとかきたる看板を出し、楽隊にて囃し立てるさま、宛然縁日の見世物小屋なり、当世人の悪趣味実には窮極する所を知らず、

当時、東京へ進出した大阪系のカフェには美人座や赤玉、加えて日輪、ユニオンなどがある。世間的な相場では、いずれもエロ・グロ・ナンセンスを売り物にしたカフェである。こうしたエロ・グロ系カフェ、とりわけそこで働く女給に対して、荷風は嫌悪感を露わにする。「醜悪下賤」とはよく言ったものである(永井1963:34-35)。

昭和6年8月29日 ——帰途肴町通大阪会館といふ新しきカフエーに入る、先年銀座風月堂に雇はれゐたりしボーイに逢ふ、女給三十余人居る由、醜悪下賤なること新宿裏町のカフエーの如し、長く居るに堪えず倉皇として去る、

文中の「大阪会館」とは荷風の記憶違いで、正しくは大阪の赤玉を開いた榎本正が、東京に進出し、銀座で開店した「銀座会館」のことであろう。そのカフェは「東洋一」を誇り、時代の最先

端を大手を振るって突き進んでいて、そこから発散する色情を漂わせた風潮は、昭和初期の銀座では色濃く漂っていた(図17, 18参照)。新宿の裏町のカフェは銀座より一段下と評価されていて、「大阪会館」(つまり銀座会館)の女給は、もはや昔の面影はないと荷風は感じ取っていた。激情を抑えきらず「醜悪下賤」という過激な言葉を浴びせかけたのは、こうした時代の風潮を肌で感じ、いたたまれなくなったからであろう。9月13日の日記では「女給も数年前に比すれば更に一層下落したり、散策の道すがらカフエーに憩ふこと漸く稀になりしは余一人のみにはあらざるべし」(永井1963:37)と、現今の世相に対して敵愾心を剥き出しにしてみせる。

この時の荷風の脳裏には、かつてパリで経験したカフェの光景がよぎったに違いない。東京のカフェは、「巴里のカフエーに似て」いても「其の実は決して然らざる」ものになっていて、西洋文明を模倣しようとしても、「到底よくすること能はざる」日本の現実そのものだ、という反省点に荷風は立ち入ってしまった(永井1964:80)。

同様な語りは荷風の代表作、『つゆのあとさき』でも読むことができる。その作品での主人公は、銀座通りにあるドンファン DONJUAN という名前のカフェに勤める君江である。君江は実家を飛び出し、保険会社の事務員になったりして糊口を凌いでいたこともあったが、今はその喫茶店の女給である。その君江に対して、若き小説家の清岡進は時にチップを10円もはすむほどの好意を持っていた、と小説では設定されている。毎日のようにカフェに通っている清岡の姿は、当時の文人の習性を写し取っている。荷風はこう書いている。「一日に一度はどうしてもカフエーか待合に行つて女給か芸者を相手に下らないことを言いながら酒を飲まなければ心淋しくてならないような習慣になっていた。」(永井1987:90)。

清岡からすれば、君江は魅力的であった。「君江の肌には一種の温度と体臭とがあつて、別に技巧を弄せずとも一度これに触れた男は終生忘れることの出来ない快感を覚える」(永井1987:62)とまで君江に惚れ込んでいた。恋狂いした清岡は、決して疑うことなく、純情そのもので君江に愛情を抱いていた。ところが、ふとしたことから

君江が別の男と会ってるのを目撃してしまい、後をつけていく。そこで初めて、自分ばかりを愛していると思っていた君江が、事もあるに「醜悪な老爺」と「嬉戯して恥じるところを知らない」現場にいるのを知ってしまったのである。清岡の自尊心は無残にも砕かれてしまった。君江に対する憤懣は、「名声籍籍たる文学者の恋人であることをさほど嬉しいとも思っていない」（永井 1987: 92）態度にも向けられている。けれども、荷風が嫌悪感を抱いたのは、君江のなかに「西洋の都会に蔓延している私娼」を見たからであり、君江は「女子の羞恥と貞操の観念とを欠いている女」（永井 1987: 102）でしかなかった。「羞恥と貞操の観念」の欠如は直接的には君江に向けて発せられた言葉であろうが、もっと一般的な立場から、当時の女給全般に向けての諷刺言葉であったに違いない。昭和期に起こった女給をめぐる倫理意識の問題は次章で問題にしたい。

5 台湾へ、満洲へ、そして朝鮮へ

昭和初期、多数の日本企業が台湾、朝鮮、満洲へと進出したのに伴い、多くの日本人も海を渡っていた。日本が台湾を領有したのが明治 28 (1895) 年で、翌年には早くも「資生堂」が台北で開業している。熱帯に蔓延する風土病対策として製薬関係の企業が先陣を切って進出したのは、それなりの理由があった。風土病についての知識が欠乏している状況では、専門の薬学系の人材の確保は植民地官吏にとって何にもまして必要であったからである。

明治 5 年に福原有信が東京・銀座で創業した資生堂は、今でこそ世界的に著名な化粧品ブランドを誇っているが、元来は西洋薬剤を専門とした薬局であった（永井・高居編 1966）。軍薬剤監であった福原有信が銀座・出雲町（現・銀座八丁目）で薬局を経営したのが資生堂の起源であって、その後の薬剤産業の発展とともに規模を拡大し、例えば「暖簾分け」などの関係をもとに販売店を拡大していったことで、各地に「資生堂」を名乗る

業者が多く出現するに至った（図 24 参照）。「台北資生堂」は福原有信の資生堂とは直接的な本店－支店関係はないが、そうした資生堂の販路拡張の過程にみられた一例である¹⁰⁾。ここで資生堂を話題にしたのは、すでに領台直後に日本を通して西洋の文物が台湾に及んでいた事実を認識しておくためである。台湾のカフェの歴史を考える時、同時に資生堂を範にした西薬の受容、そして後に見るように、多種多様な日本の化粧品の流通を併せて考えておく必要がある。一つの事象が体现する時代性は他の事象との関連で見ると、よりいっそう明白になるからである。

日本が台湾を領有した当時、台湾総督府の民生長官は後藤新平であった。元来は医者であった後藤新平のもとで台湾の衛生行政は進められていった時、台湾の資生堂もその一環を担う存在としての役割を果たしていた。明治期の台湾はいまだ衛生施設はもちろん、飲食業といえども個人経営の旧来型の店舗があるのみで、清潔といえる状態からはほど遠い状況にあった。

近代的な公園など屋外施設も充実していなかった台湾で都市整備を進め、その一環として台北市の中心部に公園を建設しようと台北庁が企画をたてたのは、領有後、十数年たって世情が安定してきた頃であった（『台湾日日新報』明治 39 年 7 月 19 日）。企画途中の段階では、公園の中心に噴水を作り、周囲には花壇と芝生をめぐらすなどの計画を描いていたが、散歩者の便宜を図るためには



図 24 「東京牛込」の「資生堂」の広告チラシ

10) 実際に「資生堂」を名乗る薬局は各地で多く見られる。その理由には暖簾分けの場合が多かったと考えられる。図 24 に見るような「東京牛込」の「資生堂」もその一つと思われ、経営的には別個の営業主体であった。ために、この資生堂の登録商標（図 24）を見ると、本家本元の資生堂の登録商標とは異なっている。

でも日本人によって西洋風の社交場が誕生したのである。銀座のプランタンではフランス帰りの松山省三のアイディアで開業したが、台湾では台北市の都市計画の一環として考案され、そして奇しくもフランス帰りのコック長が招聘されて大役を果たしていた。台湾に照準を合わせて言えば、近代を華やかに彩るカフェは、西欧文化に触発された日本人によって産み落とされた、いわば和製フランスの産物であった。

ライオン（パークライオン）は近代都市文化の一端を担っていたので、建築物としてもハイカラであったし、その装飾も垢抜けしていたようだ。くわえて、「喫茶店」であるとともに、洋食も提供でき、市民の憩いの場であることを目指していた。ここに、近代的な公園が台湾にも初めて出現したことになる。さらに、ライオンは店の経営に配慮し、台北公園を散歩する都市民が気楽に入店できるよう工夫されていた。メニューを掲げ、チップを廃止するなど、日本にはない新たな試みを実施していた。それにもかかわらず、不満を漏らす来客も少なからずいたようである。例えば、紅茶、コーヒー、パン、バターがまずいこと、南国なのに果物が少ないことなどの不平が聞かれ、不満がなかったわけではない。とはいっても開放的なカフェとして評判はよかった、と新聞は報道している（『台湾日日新報』大正2年10月2日）。

後に、日本式のカフェを見習ってエプロンをつけた女給が登場し、もっともモダンな世界と評判をとっていたライオンだが、その後にはどのような運命に翻弄されたのか補足しておきたい。開店から20余年たった昭和10年、台北では「始政四十周年記念台湾博覧会」が開催されている。その時、この敷地に迎賓館を設置する計画が企画されている。そのためにライオンは接収という事態に遭遇し、閉店せざるを得なかった。それは、あつけないライオンの幕切れであった。

しかしながら、台湾でも、昭和期はいっせいに花咲いたかのように、多くのカフェが空前の繁栄を見せつけた時代であった。ここで美人座の登場ということになる。ライオンがまだ開店していた頃、台北では多くのカフェが開業していて、そのなかには「美人座」という名称のカフェが昭和5年12月22日の新聞広告に現れている。この美人



図 27 台北での「美人座」開業広告
出典：『台湾日日新報』昭和5年12月22日。

座の経営者の名前は、残念ながら知る由もない。しかしながら、美人座の登場についての情報がなかったわけではない。美人座の開店日の新聞広告には、「東都遠征美人座専属嬢来援」という活字を見ることができる（『台湾日日新報』昭和5年12月22日）。「東都」というからには、大阪ではなく東京を指していて、結局のところ東京の美人座を指していると解釈ができる。

昭和初期の台北は、雨後のタケノコのようにカフェが簇生し、都市の風情が一変してしまった時期である。この状況は、東京や大阪と同じである。新聞広告から確認できる事柄は、美人座もまたその一翼を担っていた、ということである。その広告には、人々の欲望を掻き立てるべく大仰な言葉が並べられている。「美人女給の接待振り／時代に適したる新しき試み」と、大声で雄たけびの声を張り上げての宣伝には、余念がない（『台湾日日新報』昭和5年12月22日）。

全島一大歓楽郷の美人座

人生の春を満喫し／美人女給のサービス必ず
やお客様の御賞賛を給はる事と存じます。

「歓楽郷」という言葉は、都市の夜の賑わいを極端に強調した表現である。嬌声を揚げる女給たち、酔いつぶれる男たち、夜の巷には色情があふれ出ている。そのような雰囲気が夜空を染めつけている。大阪で見たのは「赤い灯、青い灯」の照らす恭悦至極な世界であった。その世界が東京に及び、大阪流の歓楽郷を作り上げた時、石浜金作は比喩的に「大阪カフェの東京侵略」と表現した（石浜1930:75）。「侵略」とは言い得て妙な

表現である。もう少し語気を強めて言えば、「大阪が東京を植民地にした」と言うことになるのか。そして、今度は台湾にまなざしが向けられている。東京で現出した光景が台北でも再現されたのである。かくして、間接的ながらも、大阪の歓楽郷が台北の夜空にも照らし出されたことになる。いや、いささか比喩的ではあるが、東京とともに、台湾も大阪の支配下に置かれた、と言った方がよいのかも知れない。「歓楽郷」にうごめく「植民地」、東京や台湾の都市民はその歓楽郷に紛れもなく熱狂していた。ただし、次章で見るように学校教員と警察関係者など、おおよそ倫理意識と規律的精神とで身を固めた、冷めた眼の都市民を除いては、のことである。

美人座の進撃は止まることなく、さらに朝鮮、満洲にもその矛先を向けていく。次に満洲への美人座の進出を見ておきたい。満洲は複雑に諸文化が交錯する地域である。元来はツングース系住民の居住地だったところに漢族が入植しているし、20世紀以降になってハルピンや大連を中心にロシア人が住みつくと、ロシア正教の寺院が建立されるようにロシア文化が栄えるようになる。さらに、1930年代以降は満洲国の登場によって大挙して日本人が移住し、複雑な混合文化が構成されるようになった。

1930年代には日本式のカフェが数を増し、次第に繁昌していく様子を見ることができる。満洲では日本人移民によって独自に開店したカフェが多いとはいえ、東京や大阪からの支店もみられ、例えば、『満洲日報』（昭和6年10月24日）には「銀座会館」の開店を知らせる記事が掲載されている。大連での開店で、「帝都遠来の美給揃」を謳い文句に、「東京より一流のバーテンダー来る／独特のカクテルを満喫せられよ！」と呼びかける口調の裏には、赤玉の創始者・榎本正の顔が見え隠れしているようにも感じられる。カフェ・ユニオンは昭和7年6月23日に大連の繁華街で開店している。「肉弾サービス」をモットーに「女群出陣！！／かねて待機中のセーラー服女軍／第一線に展開／東都選抜の廿八勇士 肉弾又肉弾」（『満洲日報』昭和7年6月23日）という言い回しは、戦場気分に乗じてエロの世界へと誘惑する作戦をうかがわせる。



図28 大連での「美人座」開業の広告
出典：『満洲日報』昭和7年12月8日。

1930年代は満洲でもカフェが花咲いた時代であった。当然ながら、カフェでの女給志願も激増している。満洲移民を奨励する風潮に便乗しながら、近代文明が生み出したカフェの華やかさに憧れて、日本国内からの女給志願も多くを数えた。若き女給たちは満洲への期待を抱き旅立っていった。しかしながら、現実には、いつもの時代でもそうであるが、そう甘いものではなかった。地元新聞は、「若き『満洲国』へ／押し寄せる女軍」との見出しでこの趨勢を取り上げている（『満洲日報』昭和7年3月4日）。だが、現実には理想通りにいかず、「金の実る樹」などないと、手厳しい論調で安直な世論に警告が発せられることになる。カフェが社交ダンスの場となり、風紀上好ましくない、と現地警察は取り締まりの強化に取り組んでいたからである。

こうした状況下、美人座も満洲進出を企画していた。美人座が大連で支店を開く計画は、早くも昭和6（1931）年の7月頃から本格化していた。『満洲日報』（昭和6年7月22日）は、「大阪カフェー界の王座を占むる美人座進出の計画が具体化し、総支配人荒本文二郎、副支配人杉山八両氏は



図 29 「美人座の女給軍」の到来を告げる記事
出典：『京城日報』昭和6年7月2日。



図 30 中国・天津の美人座の広告
出典：川島 1939：136。

石井大連署長を訪問」と伝えている。その時、石井署長が応答した内容は、「現在の群小カフェ同様のものなれば許可せぬが、費用を惜しまず高級

的大規模なものなれば請願の余地がある」ということであった。

結局のところ、美人座は大連で開店できた。開店時の様子は不明であるが、昭和7年12月8日の新聞記事には美人座の広告を見ることができる。曰く、「明朗花の如き／五美人現る」と題し、「内地より二日末迄信濃町市場前／美人座にてSPサービス!!!」と。大連署の認可は下り、大阪カフェは満洲での足場を築いたのである。

1930年代初頭の朝鮮も近代化の波に激しく揺さぶられていて、電力事業の発展は都市に光彩をもたらしていた。京城（現：ソウル市）の街路は明るく照らされ、「尖端時代の寵児：ネオン・サインが京城に」と新聞が報道するように（『京城日報』〔昭和6年3月14日〕、豊かな消費文明への渴望が渦を巻き始めていた。社交ダンスに興じる市民も現れ、日本式のカフェが華々しく開店す

るようになる。享樂の世界が築かれていったのは、この時代からである。

昭和6年のカフェの繁昌は、李朝朝鮮時代や日本統治初期の時代とは異なった、この時代の都市の風情をよく物語っている。京城の有名カフェであったサロン・アルプスへ、大阪の美人座の女給がダンサーとして出張してきたこともあった（『京城日報』昭和6年4月23日）。京城に大阪系の美人座が誕生したのは、この年のことであった。7月5日の記事は「本美人座京城支店」の開店披露を告げている（『京城日報』昭和6年7月5日）。それに先立って、大阪の美人座は総勢二十人にのぼる女給を釜山経由で送り込んでいる。その時の引率者はこの年の二月頃から計画を立てていたというから（『京城日報』昭和6年7月2日）、群立する多数のあるカフェ群のなかにあっても採算がとれる、と予測したに違いない。昭和期の朝鮮は、それまでの時代と比べて消費文化が一段と進んだ時代であった。

なお、付加して言えば、中国・天津にあった日本人租界地にも大阪に拠点を持つ美人座系の大阪会館が開店している。図15で見たマッチラベルと同じ図案が描かれた店舗の紹介には、「美はしの国・大和撫子の微笑み！ サア行こう豪華の殿堂へ」という文言が添えられている（川島1939:136）。常連客は租界地の日本人かも知れないが、この地にも大阪の美人座の展開を眼の当たりにすることができる。

今までに、昭和期のカフェを代表する二つのカフェ、赤玉と美人座が大阪で生れ、東京にまで進出し、絶頂期を迎えていたのを見て来た。このうちでも、美人座はメディアなどでも取り上げられる機会が多く、まさに昭和期の代表にふさわしい経営発展を遂げたカフェであった。美人座、あるいは本美人座を名乗るカフェは常に経営規模の拡大を目指していて、金沢、岡山などの都府県のみならず、さらには京城、大連、天津にまで進出して、企業としての成長を示していた。新聞広告やマッチラベルからは、「美人座」を名乗るカフェが、朝鮮、満洲でも存在しているのを確かめることができる。そのほかにも、多くのカフェが海外へと飛躍の舞台を広げていた。これらすべてが直接的に大阪の道頓堀と関係があるわけではな

いが、植民地を舞台にしたカフェ文化の展開が、とりわけ大阪とのかかわりのなかで成長していった事実は無視できない。その姿は多彩な形態をとっていた。カフェで働く女給、さらには経営者には、日本人ばかりでなく、台湾、満洲、朝鮮の住民がいたし、カフェでの遊興を楽しんでいた人たちの群にもまた多くの現地都市住民がいた。カフェでの遊興空間はレストランであるばかりか、ジャズや舞踊の舞台でもあり、女給と来客との社交の場であり、そしてセクシャリティの発露の空間でもあった。大阪からもたらされたカフェは東京ではエロティズムを助長するものとして激しく反撓されたのは確かである。永井荷風は、その一人であった。しかしながら、ひとたび定着したカフェはこのような様々な状況を生み出していく空間なのであって、東アジア全体を通観してみれば、昭和期には一つの「カフェ文化圏」が形成されつつあった、とすることができる。

鄭永計の「可否茶館」は置いておくとして、日本に西欧風のカフェ、プラントンが誕生したのは、すでに見てきた通り東京では明治44年であった。ほぼ同時期に大阪でも独自のカフェを成立させていた。しかし、昭和期になるとカフェは独特な展開を示すようになる。いささか気負って言えば、大阪、道頓堀のカフェを基盤として新たなカフェ文化が生まれ、その文化が東京へ、さらに日本全国へと影響力を強め、勢力圏を拡大していったのである。そればかりではない。台湾、朝鮮、満洲へと大阪流カフェはさらに展開していった。石浜金作のひそみにならって比喩的に言えば、巨大資本をもとにした「大阪帝国主義」が東京を「侵略」し「植民地」にし、ついで台湾、満洲、朝鮮を支配下におき、「カフェ帝国」の支配権を確立していった、ということになろうか。その表現はいささかどぎつすぎるかも知れないが、昭和期は、日本はもちろん東アジアにおいても産業構造の変革、言い換えると工業化の時代を迎え、所得水準の向上とともに消費文化が進展した時代であった。カフェ文化の興隆はこうした時代背景を読み取っていかねばならないだろう。ここに昭和史の新たなページが書き加えられた。それらの地域での物語は次回以降詳しく述べることにしよう。

引用文献

- 明尾圭造 2005「モダンイズムに溺れることなく」『大阪人』59-10: 26-29。
- 浅井カヨ 2016『モダンガールのス・メ』、東京：原書房。
- 淡谷のり子 1975「わたしのモダンガール記」、婦人画報編（熊井戸立雄編）1975『ファッションと風俗の70年』pp.188-189、東京：婦人画報社。
- 安藤更生 1977『銀座細見』、中央公論社、（初出、1931年、春陽堂）。
- 生田誠 2012『モダンガール大図鑑：大正・昭和のおしゃれ女子』、東京：河出書房新社。
- 石浜金作 1930「大阪カフェの東京侵略」『改造』1930年12月号：75-79。
- 石角春之助 1936「銀座カフェー街の変遷」『江戸と東京』、2-7: 49-54。
- 糸永菊雄 1931「カフェー経営内輪話：どうして大阪エロは進出した？」『中外財界』6-5: 297-298。
- 宇野浩二 1925「カフェーの今昔」『中央公論』450（40年7月号）：118-124。
- 大阪商工会議所 1933『大阪商工名録』、大阪：大阪商工会議所。
- 大阪毎日新聞社編 1925『大大阪記念博覧会誌』、大阪：大阪毎日新聞社。
- 大阪府警察史編集委員会編 1972『大阪府警察史』第2巻、大阪：大阪府警察本部。
- 太田俊太郎 1935『人事調査録 完』、大阪：人事調査録刊行会（赤植探偵社所蔵版）。
- 奥田安之助 1919「西洋料理就て」『道頓堀』10: 21。
——— 1920「西洋料理就て（承前）」『道頓堀』11: 36。
- 織田作之助 2004『世相』、東京：講談社。
- 片山三七夫 1952『大阪歓楽街史』、富田林市：社交街新聞社。
- 川島信太郎 1939『北支蒙疆商工名鑑』、東京：日本商業通信社。
- 岸本水府 1932『京阪神盛り場風景』、東京：盛文堂。
- 北沢秀一 1923『近代女性の表現』、東京：改造社。
——— 1924「モダン・ガール」『女性』大正13年8月号：226-237。
- 木村毅 1997『文芸東西南北：明治・大正文学諸断面の新研究』、東京：平凡社。
- 斎藤美奈子 2000『モダンガール論：女の子には出世の道が二つある』、東京：マガジン。
- 酒井潔 2014『日本歓楽郷案内』、東京：中央公論社（原著〈1931年、東京：成光館書店〉）。
- 思案外史 1889「下谷西黒川町 可否茶館告修」『我楽多文庫』1-1: 13。
- 篠崎昌美 1954『浪華夜はなし：大阪文化の足あと』、東京：朝日新聞社。
- 柴山燐子など〈ファッションクラブ流行座談会〉1934『ファッションクラブ流行座談会』、『ファッション』5: 22-25。
- 清水毎治 1931「新興商店界を飾る人々：カフェー経営のナンバー・ワン 榎本正氏」『商店界』11-12: 25-31。
- 人事調査録刊行会編 1935『人事調査録 完』、大阪：赤植探偵社。
- 鈴木貞美編 1989『モダンガールの誘惑：モダン都市文学Ⅱ』、東京：平凡社。
- 高橋康雄 1999『断髪する女たち』、東京：教育出版。
- 高橋由太郎 1931『カフェー外観集』巻二、東京：洪洋社。
——— 1932『カフェー内部集』巻二、東京：洪洋社。
- 中京ハーモニカ研究所編 1928『流行カフェー小唄集』、名古屋市：中京ハーモニカ研究所。
- 千葉亀雄 1927「モダン・ガール」『家庭講座』2-2: 19-21。
- 鶴丸梅太郎 1932「道頓堀のカフェー黎明期を語る」『上方』22: 38-42。
- 寺川信 1933「大阪カフェ源流考」『上方』27: 47-52。
- 内務省警保局編 1934『昭和九年 カフェーと女給』、東京：内務省計保局（非売品）。
- 永井荷風 1947『漫東綺譚』、東京：岩波書店、（1964『荷風全集』9巻、再録、岩波書店）。
——— 1963「断腸亭日記 巻15」『荷風全集』21巻、東京：岩波書店。
——— 1964「断腸亭日記 巻10」『荷風全集』20巻、東京：岩波書店。
——— 1987『つゆのあとさき（改版）』、東京：岩波書店、（1963『荷風全集』8巻、収録、岩波書店）。
- 永井保・高居昌一郎 1966『福原有信伝』、東京：中央公論事業出版（制作）、資生堂（刊行元）。
- 永井良和 2004「解説：近代都市文化と〈大阪カフェーの東征〉」、津金沢聡広・土屋礼子 2004『大正・昭和の風俗批評と社会探訪：村嶋婦之著作選集 第一巻 カフェー考現学』、東京：柏書房。
- 新居格 1925「近代女性の社会的考察」『太陽』31-11: 140-143。
- 野方町人 1932「没落の淵から一大カフェー王国を築き上げた変り種の奮闘児 榎本正君」『実業の日本』35-23: 88-91。
- 野口孝一 2018『銀座カフェー興亡史』、東京：平凡

社。

登尾源一 1935『財界の前線に踊る人々』、大阪：新興実業社。

ハキム、キャサリン（田口味和訳）2012『エロティック・キャピタル：すべてが手に入る自分磨き』、東京：共同通信社。

長谷川泰三 2008『日本で最初の喫茶店：〈ブラジル移民の父〉がはじめたカフェー パウリスタ物語』、東京：文園社。

橋爪紳也 2003 a「紙屑のモダニズム：旗の酒場と足立源一郎」『彷徨』210：46-48。

——— 2003 b「忘れられた近代大阪都市風景：雑誌『道頓堀』に描かれた大正の道頓堀と宗右衛門町」『大阪の歴史』62：87-105。

橋爪紳也（監修）1996『心斎橋の文化史』、大阪：心斎橋筋商店街振興組合。

橋爪紳也 2005『モダン道頓堀探検』、大阪：創元社。
阪急沿線都市研究会 1994『阪急沿線都市研究会報告書4（雑誌〈ファッション〉について）』、大阪：阪急沿線都市研究会事務局。

原阿佐緒 1928「盟ひの證に」『女性』13-3：144-146。

日比繁治郎 1930『道頓堀通』、東京：四六書院。

弘中柳三 1935『呉花街案内』、呉市：中国日報社。

眉山人 1889「黄菊白菊」『文庫』19：464-474。

星田宏司 2003『黎明期における日本珈琲店史』、東京：いなほ書房。

——— 2008『日本最初の喫茶店』、いなほ書房。

松崎天民 2002『銀座』、東京：筑摩書房、（初出、1927年、銀座ぶらガイド社）。

松山省三 1934「カフェーブランタン創業の頃」『文化集団』2-6：50-51, 37。

宮前治清 1935「一大カフェー王国を築く：多額納税者 榎本正——街の当りや列伝 その2」『モダン日本』6-2：72-73）。

三好一 2018『モダン絵封筒の世界：大正・昭和』、京都：紫紅社。

三田純一 1978『遥かなり道頓堀』、東京：九芸出版。

村嶋帰之 1931『カフェー考現学』、東京：日日書房、（後、津金澤聰廣・土屋礼子編 2004『村嶋帰之著作集』第1巻、東京：柏書房に収録）。

望月百合子 1928「私の断髪物語」『女性』13-3：153-154。

森まゆみ 2010『断髪のモダンガール』、東京：文芸春秋（文芸文庫）。

著者不詳 a 1919「バアとカフェの女」『道頓堀』創刊号：13。

——— b 1919「虹の女？：大多福食堂の怪美人」『道頓堀』3：15。

——— c 1929「近時流行の社交ダンスに対する感想」『クロネコ』創刊号：10-14。

——— d 1939「美人座」『キネマ旬報』329号（1939年5月1日）。

附 大阪府立図書館（中之島）には、以下のように各種の「電話番号簿」が所蔵されている。表1での引用資料は下線で示している。（カッコ内は奥付の年月日）
大阪中央電話局（昭和2年11月10日）『大阪電話番号簿（昭和2年4月30日現在）』、大阪：大阪中央電話局。

駈々堂・十字屋共編（昭和5年2月10日）『最近大阪市 全府管内 神戸市 阪神間 阪神営業別電話名簿』、大阪：駈々堂。

大阪中央電話局（昭和5年7月26日）『大阪電話番号簿（昭和5年4月30日現在）』、大阪：大阪中央電話局。

村上蕃編（昭和7年12月15日）『阪神職業別電話名簿』、大阪：大阪廣文館。

井村雅宥編（昭和9年11月25日）『職業別電話名簿』、大阪：京阪神職業別電話名簿編纂所。

井村雅宥編（昭和10年6月5日）『職業別電話名簿』、大阪：京阪神職業別電話名簿編纂所。

井村雅宥編（昭和10年6月7日）『職業別電話名簿（増補改訂版）』、大阪：京阪神職業別電話名簿編纂所。

井村雅宥編（昭和11年12月1日）『職業別電話名簿』、大阪：京阪神職業別電話名簿編纂所。

井村雅宥編（昭和12年1月10日）『職業別電話名簿』、大阪：京阪神職業別電話名簿編纂所。

井村雅宥編（昭和12年3月10日）『職業別電話名簿』、大阪：京阪神職業別電話名簿編纂所。

大阪中央電話局（昭和12年6月20日）『大阪市及近郊 電話番号簿』、大阪：大阪中央電話局。

大阪中央電話局（昭和14年7月7日）『大阪市電話番号簿（昭和14年4月1日現在）』、大阪市：大阪中央電話局。

井村雅宥編（昭和15年1月20日）『職業別電話名簿』、大阪市：京阪神職業別電話名簿編纂所。

井村雅宥編（昭和16年10月5日）『京阪神職業別電話名簿』、大阪：報国出版社。

大阪中央電話局（昭和18年3月31日）『大阪市電話番号簿（昭和17年10月1日現在）』、大阪：中央電話局。

The Story of *Bijinza* (The Beauty Club): A history of an Iconic Café in Modern Japan (1)

ABSTRACT

Many scholars have studied the history of cafés in Japan. In particular, Murashima, a famous writer, contributed to the study of amusement activities in Osaka. He analyzed many aspects of subcultures in Osaka from sociological point of view.

The present author shares the same interest with him in studying Osaka's modern history, particularly popular culture in the Meiji, Taisho, and Showa eras. At the beginning of Showa era, former waitresses created a Japanese-style café, serving guests, sitting together in the same sofas, enjoying conversation, and eating dishes as companions. The waitresses were called *jyokyu* in Japanese, some of whom were “sex workers.”

This paper describes the characteristic features of the famous café, *Bijinza* (The Beauty Club) in the Dotonbori area of Osaka, which serves as an example of leisure activities in the Showa era before World War II.

Key Words: *Bijinza*, café, *jyokyu* (waitress), Dotonbori (Osaka), erotic capital, modern Japan